

601
35



* 0053501000 *

0053501-000

601-35

アチックミュージアム彙報

アチックミュージアム

第18

昭12

AIA

601

35

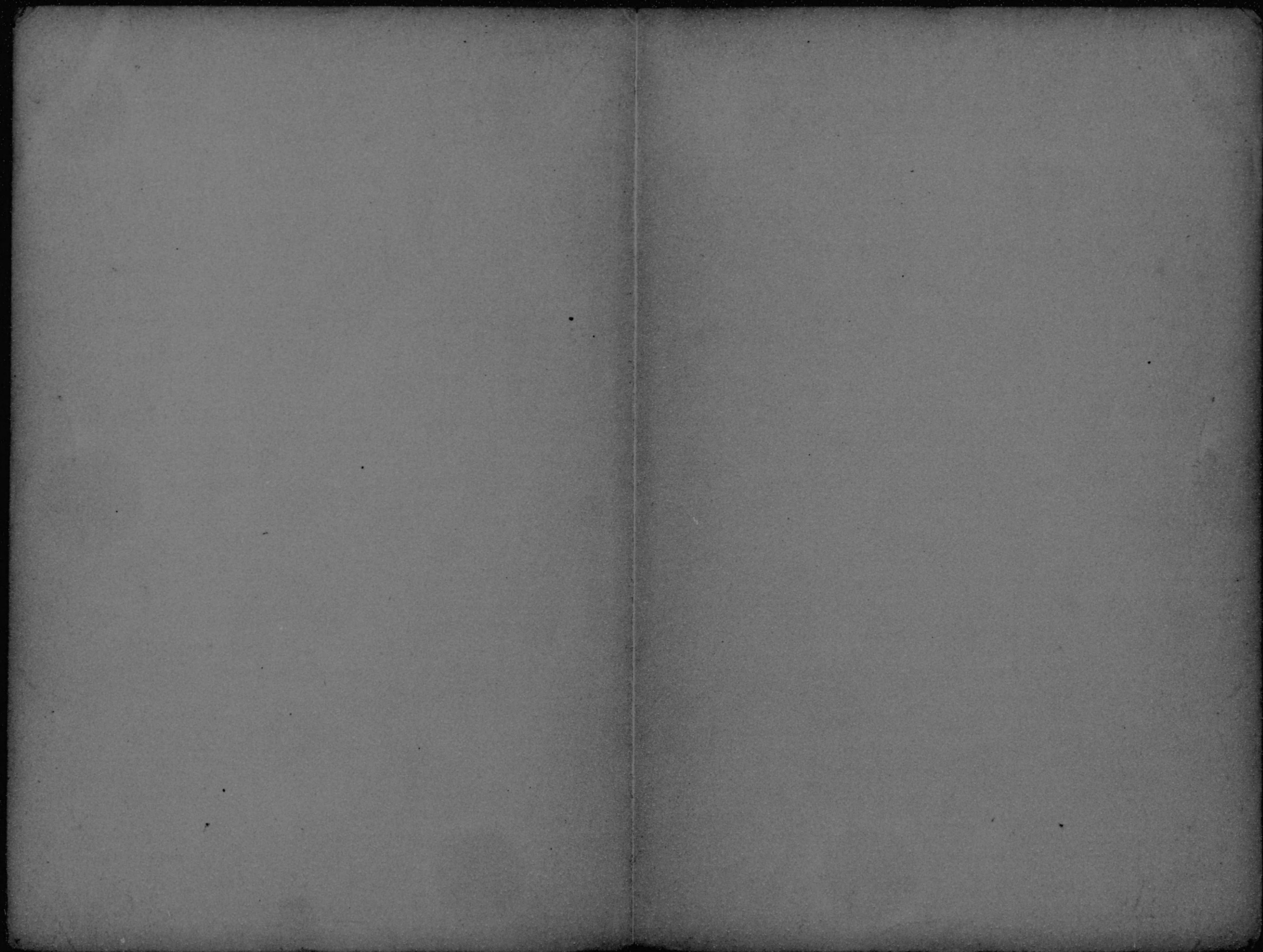
アチツク ミューゼウム彙報第十八

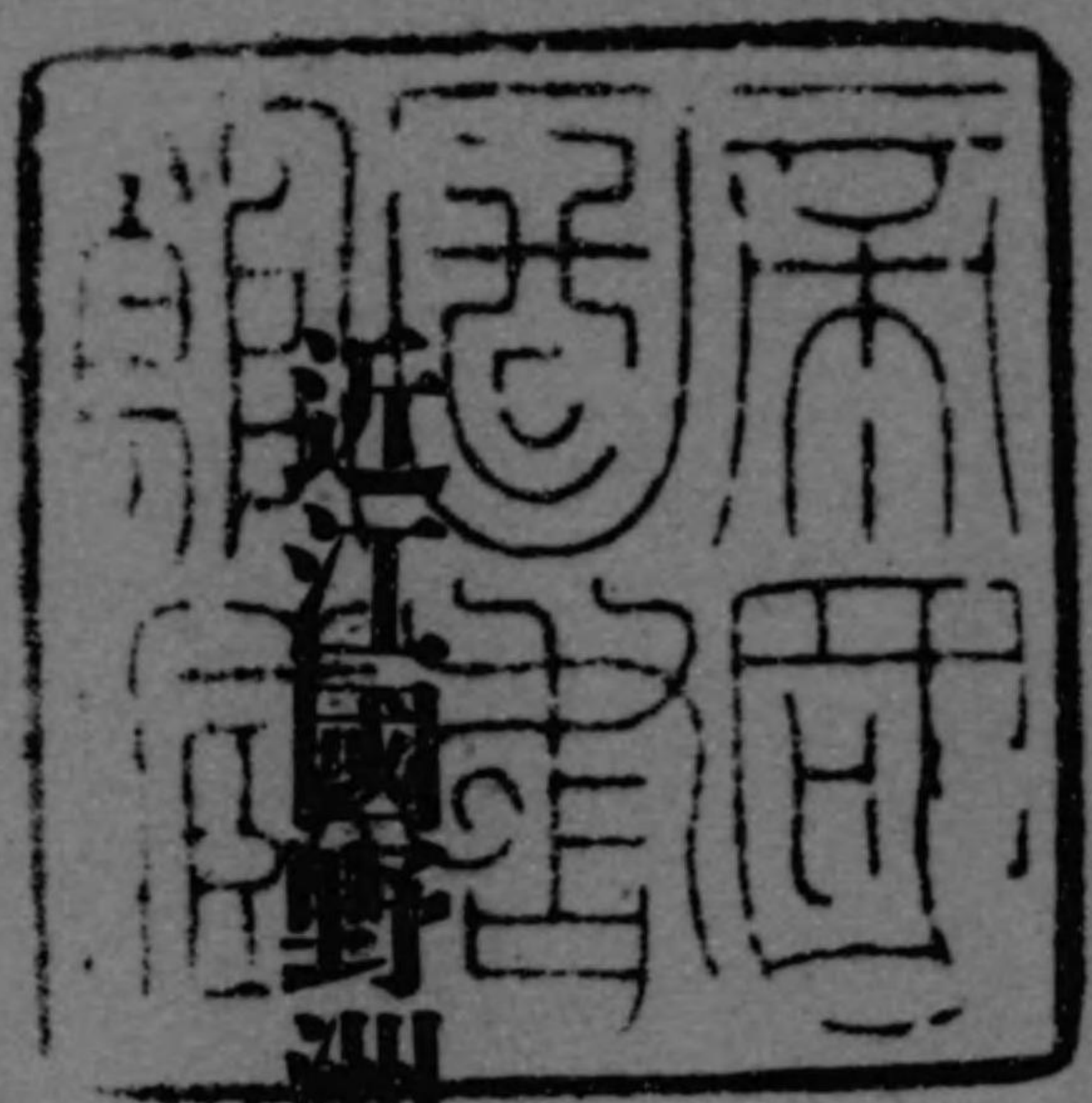
近江國野洲川築漁業史資料

祝 宮 靜 考註

アチツク ミューゼウム刊

493





近江國野洲川築漁業史資料

アチツク ミューゼウム彙報 第十八

祝 宮 静 考註



アチツク ミューゼウム刊

まへがき

昭和八年八月一日、私は初めて子爵澁澤敬三先生の醫咳に接したのであります。眞夏とはいへ庭前の芝生が蒼蒼として涼味を漂はす朝でありました。

その日から凡そ二週間ほども前だったでせうか、或日のこと、文學博士植木直一郎先生より次の様な御話を承つたのであります——澁澤子爵が豆州内浦で夥しき古文書を集められた、自分は其一部分を拜見して、これは面白い、この儘にして置くのは惜しいと思つた、ところが澁澤子爵も之を適當に編纂して世に出したいと考へられ既に其準備を進めて居られる、自分は穂積男爵を通じて御相談を受けたのであるが、君にやる氣さへあるならば暇を見て編纂の御手傳をして貰ひたいと思ふ——

こんなわけで私は植木先生に仲はれまして、その日、參上した様な次第でありました。植木先生よりも既に大體の御話を承つて居りましたけれど、更に詳しいことを新しく澁澤先生より伺ひまして愈々興味を持つに至つたのであります。

かうして及ばず乍ら御手傳をして居ります間に、私は色々な新知識を與へられました。この點、澁澤先生にもアチツク・ミューゼウム同人諸君にも厚く御禮を申し上げなければなりません。就中、漁業史に關する卓抜なる澁澤先生の御高見によつて私が新しい方向へ導かれましたことは永く銘記すべき事實であつたと思ひます。何と

なれば、植木先生の御紹介で圖らずも澁澤先生の知遇を得、且つ澁澤先生の御指導で漁業史研究に入門し、そして全く思ひもかけなかつた様な新しいテーマを得るに至つたからであります。

實は、私は神社經濟史を専攻し昭和六年には「神社の經濟生活」といふ愚著を公にしたりしたこともあつたのですが、間もなく行詰りを感じてゐたところでありました。さう云ふやうな時、漁業史の知識に一寸でも觸れたのでありますから可なり敏感になつてゐたものと思はれます。ある日、澁澤先生が日御碕社と杵築大社との漁場争奪に就いて御話をされたのでありますが、これ即ち私が極めて大雑把に「神社と漁業」といふ新しいテーマを掴んだ機縁であつたのであります。尤も其以前に琵琶湖の漁業と神社との關係を示す少しばかりの史料を持つてゐたのでありますが、特殊な見方なり考へ方なりを持つて居たわけではありませんでしたから、稍とはつきりした見當を付けるに至つたのは矢張り澁澤先生の御話を伺つた結果であると云へるのであります。たゞ然し私の場合は、多くの史料の中から謂はゞ歸納的にテーマを掴んだものではありませんでしたことが非常な弱點であつたのであります。即ち私は新しいテーマのために史料を揃へなければならぬと云ふ立場になつたのであります。一體、テーマのために史料を揃へるといふことが、全く間違つた方法ではないにしても、本格的な方法だとは残念乍ら云へないと思ひます。しかし私の場合はテーマのために史料を揃へるといふ形にならざるを得なかつたのであります。しかもそのためには遠く地方に採訪する必要もあつたのですが、この採訪旅行は私個人の負擔に過ぎるものでしたから、以前より私の研究に理解と同情とを寄せられてゐた高山昇先生や田中俊清先生が私のために研究費の捻出を配慮して下さいましたのであります。その結果、圖らずも帝國學士院の推薦により、昭和九年八月

以降、末延獎學金の給付を受けることになつたのであります。これには、直接、文學博士三上參次先生の御盡力を煩はしたとのことでありまして、私の最も光榮とするところであります。

かくして末延獎學金により後顧の憂なきに至りました私は、時間の許す限り史料の採集・整理・考證に努めたつもりでありましたが、種々なる事情のため、定められた二ケ年間を過ぐることに約半歳、本年三月末日に漸く研究の概要を報告することが出来たのであります（小著「神社漁業史序説」参照）この點に就いては末延財團當局に深く御詫びしなければならぬのであります。報告の延引いたしましたばかりでなく研究の結果そのものに就いても同情と援助とを賜はつた各方面の御期待に副ふことが出来ましたか否かを恐れるのであります。たゞ茲に「近江國野洲川築漁業史資料」を編み研究の一部を發表いたしましたことが、少しでも學界の關心に償するといはしましたならば、自ら慰むるに足ると思ふのであります。

最後に、澁澤先生が本書に「アチツクミューゼウム彙報第十八輯」のタイトルを許され本書公刊の機會を與へられました御好意に對して心から御禮を申し上げます。なほ本書史料篇に挿入いたしました寫眞は、三上神社文書が大西道治氏の・兵主神社文書が木川半之丞氏の撮影に係るところであります。また三上神社文書を閲覧するに當つては舊社家大谷治雄氏の・同書影寫本（史料編纂所々藏）を閲覧するに當つては史料編纂官相田二郎氏の御指導を煩はしました。特記して謝意を表する次第であります。

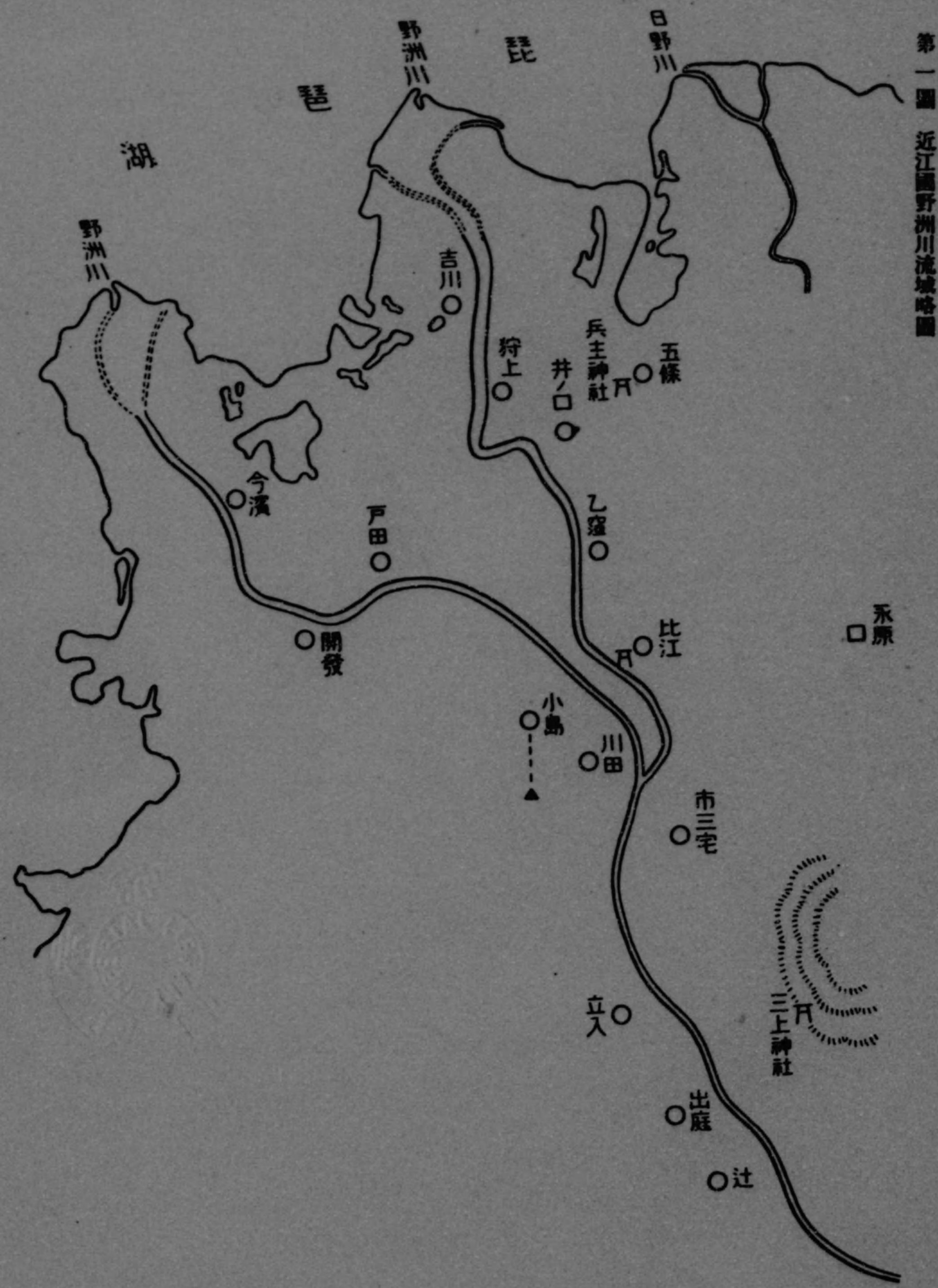
アチツクミューゼウムにて

昭和十二年六月十八日

祝 宮 靜

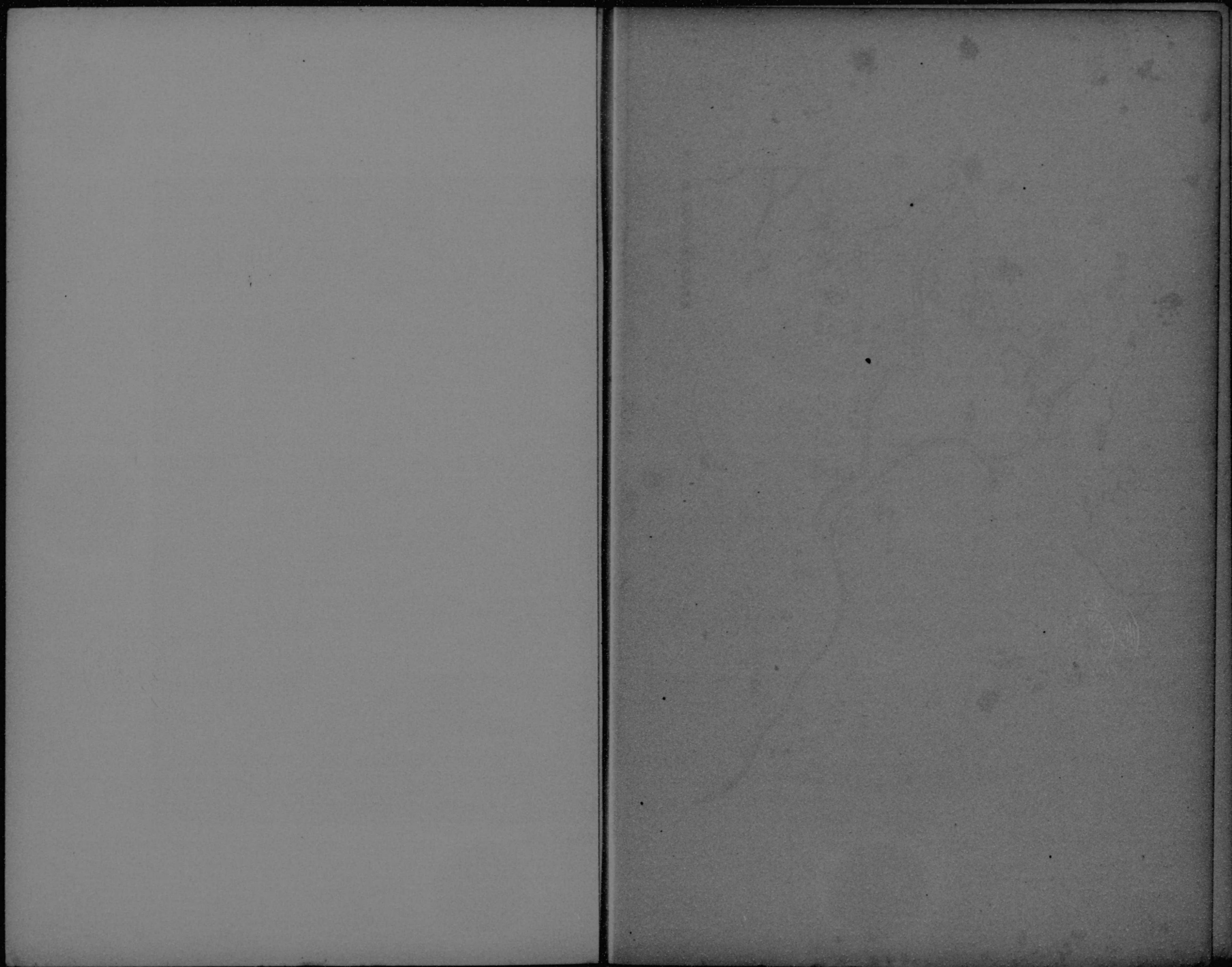
近江國野洲川築漁業史資料目次

| | |
|---------|-----|
| まへがき | 一 |
| 史料篇 第一部 | 一 |
| 史料篇 第二部 | 二九 |
| 語彙篇 | 一五三 |
| 考證篇 | 一六三 |



第一圖 近江野洲川流域略圖

近江國野洲川流域略圖





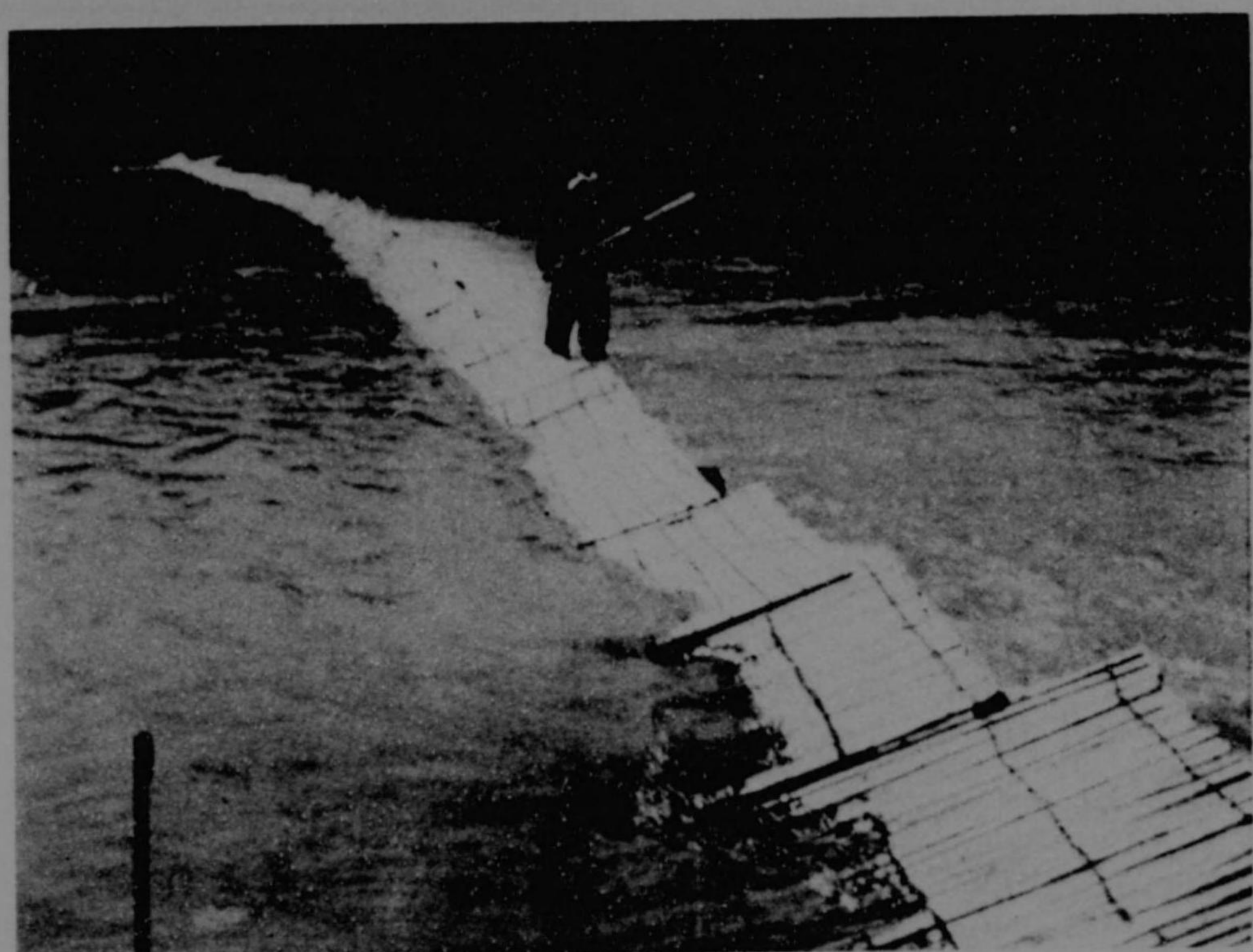
〔北〕

〔藏氏雄治谷大〕

木川半之丞氏作



第三圖 築 (比江附近)

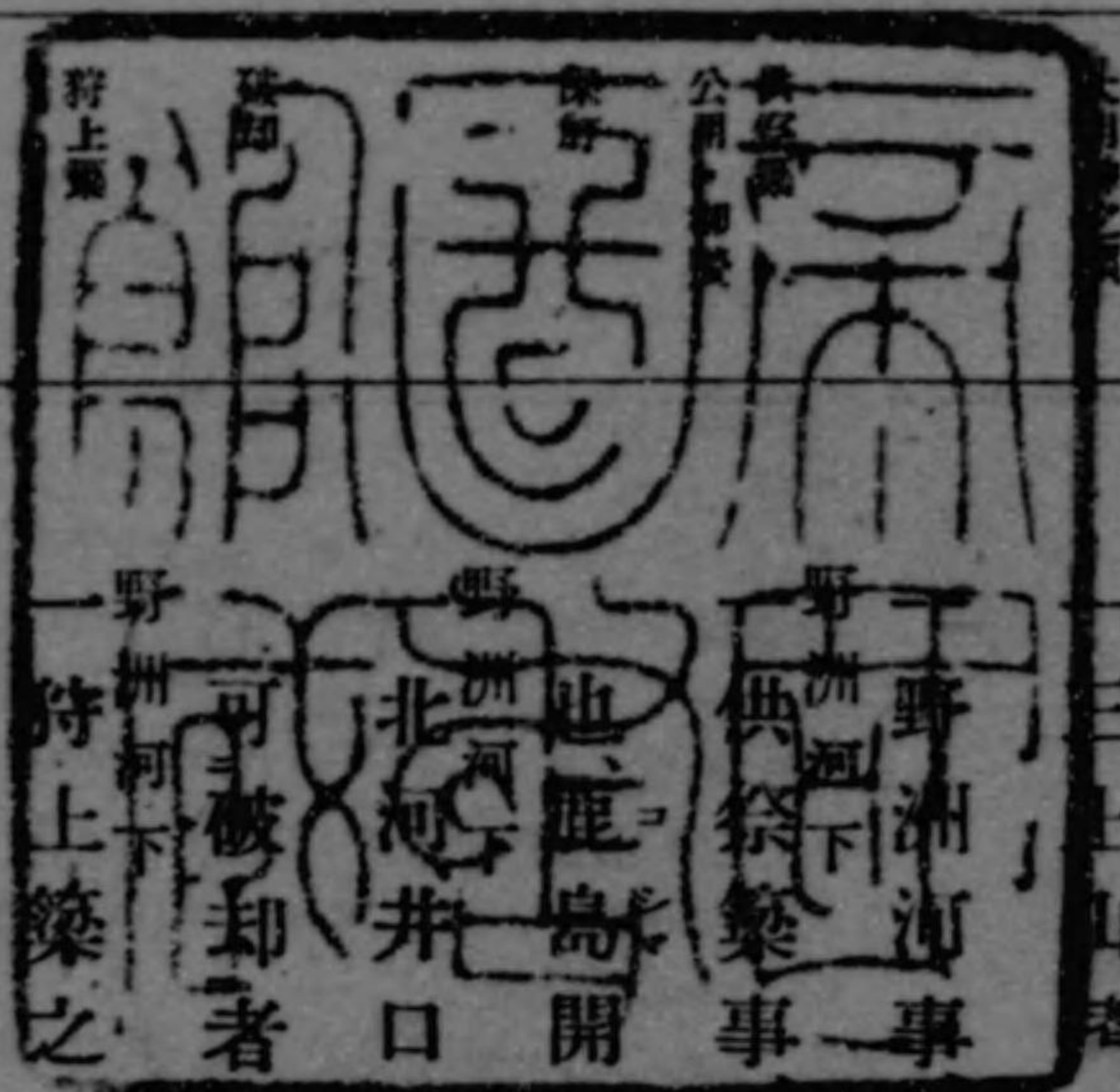


史料篇 第一部

三上神社文書

凡 例

- 一 史料は年代順に載收して通シ番號を附した
- 一 出来るだけ原本の體裁を重んじたが句讀點と返點とは編者が施したものである、また平出や闕字は何れも一字あきにしたが前者（平出）に於て下から五字以内に當る場合は此限りでない
- 一 凡て「」内は編者の註記したものである
- 一 蠹蝕その他で文字の読み難いものは□□で示し推讀し得る場合には右傍に「」して註記した
- 一 讀解不能の文字ある時は○○で示した
- 一 印章中、普通の捺印は（印）とし花押は（花押）としたが寫本に於て印とあるものは其儘とした
- 一 頭註の採録に就いては別に確固たる標準があるわけでもなく、また語彙篇とも無關係である



三上社神領山河等之事

合 山千町 河千町 田千町

三上山者 自養老年中爲大明神之領社務一圓進止知行無相違者也〔中略〕

野洲河事 南北隨流可爲神領者也

野洲河下 供祭事 南河留田下築也、公用漆貫五百文、毎日長日御贄無懈怠被沙汰者

野洲河下 也、雁島開發保釘同前

野洲河下 北河井口數鄉築之事、公用五貫文長日御贄等有違亂之輩者任先例雖何時

野洲河下 可被却者也

野洲河下 野上築之事、公用漆貫文長日御贄無懈怠被沙汰者也、但此築者自往古中瀬

野洲河下 三問者あくる者也、萬一背者祀之例有異儀之輩者可處罪科者也

野洲河下 一北河數鄉秋築之事、公用壹貫文、御贄統五喉、九月九日社頭備御供

野洲河下 一北河保釘之事雖致新儀無志俄之停止了

一 南河同前

比江類

三宅春築
五月五日

- 一 乙窟同つら東築之事、春秋公用壹貫五百文、長日御贄無懈怠、被其沙汰者也
- 一 比江築之事、春秋公用八百文、長日御贄等被其沙汰者也
- 一 三宅春築之事、公用壹貫文、長日御贄四十喉、五月五日以前被其沙汰者也
- 一 三上庄上河、中河、衆公用五百文、御贄五喉、被其沙汰者也、又河狩せん○なんとも出也

右、此條々自養老年中、所定置也、末代守掟可知行者也、往古之支證等、一代一張書しるし置者也、仍定置所狀如件

正和元年貳月五日

三上社家
政

□所

二

請申三上社御供祭河田前春築之事

右件之御供祭者、毎年御公用貳貫五百文、并御禰本五百文以上、參貫文、同贄等、毎年無懈怠、可致其沙汰申候、萬一御公用無沙汰事候者、雖爲何時、此築被召放可申候、又者、任法可被處罪科申者也、仍爲後證、請文狀如件

河田前春築

被召放

三上社家
河田前春築
被召放
請申三上社御供祭河田前春築之事
右件之御供祭者、毎年御公用貳貫五百文、并御禰本五百文以上、參貫文、同贄等、毎年無懈怠、可致其沙汰申候、萬一御公用無沙汰事候者、雖爲何時、此築被召放可申候、又者、任法可被處罪科申者也、仍爲後證、請文狀如件

公用・御費

三宅前春築

應永五年戊寅後四月二日

三

請申三上社御供祭三宅前春築之事

合壹所者

右件御供祭者每年御公用御費等無懈怠沙汰可申者也但春築之御公用參百

| | | | | | | | |
|----|----|--------------------|--------------------|------|-----|-----|-------|
| 同 | 同 | 小 | 河 | きたむら | さしき | こしま | こしま |
| ○ | 新 | 源 <small>島</small> | 孫 <small>田</small> | 兵衛 | 六 | 四郎 | 左衛門太郎 |
| | 九 | 五 | 四 | 四 | | 左衛門 | 太郎 |
| ○ | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 在判 | 在判 |
| 在判 | 在判 | 在判 | 在判 | 在判 | 在判 | | |

三宅衆
川田之人數

文、三月仁必之沙汰可申者也、此築之事、雖爲一時贊於弘者御公用御費等、任法沙汰可申候、若有無沙汰之儀者、堅可有御催促候、其時更不可有一言子細者也、將又此春築之事、萬一此三宅衆中無沙汰仕、懈怠之儀候者、春秋共仁川田之人數仁可被仰付候、其時違亂煩之儀不可申候、仍爲後日請文狀如件

寬正四年癸未七月 日

右京亮 泰

清 在判

塚本孫太郎 泰

賢 在判

勘解由 泰

滿 在判

新左衛門 在判

中

務 在判

源四郎 兵

衛 在判

河田衆

四

請申三上社御供祭河田築之事

合壹所者

右件築者御公用ハ下鮎分貳百文、上鮎分貳百文、御費者上下之分ニ五喉、九月

下鮎・上鮎
九月九日

すをひろけ申

九日已前ニ可致沙汰者也、猶以一時もすをひろけ申候者御公用御費等可沙汰申者也、萬一無沙汰仕候者堅可預御催促候也、仍爲後日請文狀如件

永正八年辛未六月廿六日

北村勘解由左衛門 在判

塚本藤兵衛 在判

辻膳左衛門

塚本與太郎

北村中務内

神 館 殿 江

五

就當村衆歟築之儀各一味同心ニ致相談可申達連署之事

一小中路村いなはた村、妙光寺村衆、今度築をさし候へハ、兎角被申、一向無謂次第候間、幾重にも於地下理可申候、萬一不相調候ハ、永原殿へ御理可申達候、自然禮物等入り候共各一味同心ニ可仕候、但禮物無御出方者築衆ハ

可相除候、誰と申なと、候て於向後同心申間敷なと、申間敷候、人數内ニ一人成共多被申方へ可有同心候、若右之旨構私曲同心不申候ハ、八幡大菩薩氏神可蒙御罰永罷者也、仍以起請文申合相定狀如件

弘治貳年辰八月廿二日

小林孫左衛門 (花押)

(以下九名省畧)

六

申上川面築條と事

一 數十年歟築指申事

一 去年始而東林寺村より新儀ニ歟築申懸候事

一 毎年正月廿五日、神館方人數仁テ兩村衆悉ひす講仕、築川面置目衆儀申事

一 一切のほり魚之儀、川幾筋流候共三村衆春秋共ニ築指切申候、殊ニ上下築之境在之事

一 御公事申上候半築、一昨日廿八日ニ東林寺衆罷出、築指申候人數、岩藏平子平野小三郎、神崎又二郎、竹田介太郎、大谷方同人夫一人、此分大方申上候、此

川面築

築條

去ひす儀
懸置日

のほり魚・三
村衆・指切

半築

社家衆

旨御注進申入候處ニ昨日廿九日巳刻ニ彼築上申事

一 三村名主中まうと(ろカ)にて無之様體申上候趣被成御尋可被下事

一 川面社家衆はかりの知行にて無之候、於御尋者子細可申上事

右條と儀可然様ニ御申所仰候

八月朔日

三上

三

村

奥 石見 守殿

北村與三左衛門尉殿

清水九郎左衛門尉殿

七

(朱筆) 東林寺社家衆より永原殿へ申書付

一 此儀者三村衆もさ、れ様在之事候、其様體申分事

一 此儀者東林寺衆やな(下)之しもニ去年新儀ニ自三村築さ、れ候間、相拘御理申、即無別儀被仰付候事

東林寺衆

一此儀者東林寺衆不存事^(ニ)候間、不及分別候事

一此儀者一向相違之被申事、不及是非候、尙以彼方へ可被成御尋候、以其上可申之事

鮎築・鮎築
類衆

一此儀者鮎築打申候者、此方可爲越度候、今度打申候者鮎築にて殊^(ニ)三村衆中ニも右之築衆候様體ニ被存、如此被申事、言語道斷之儀候、被成御尋堅可被仰付之事

一此儀者まうとも可在之候、名主衆も可在之候條、不及是非事

一此儀者川表神館方并社家衆第一存知之儀候、然共近年者以其下惣名主も不寄誰と築被指候、然ニ三村迄知行之様ニ被申候哉、不審存候、幸去年彼方も此方もやな相さし候、如其可被仰付之事

^(朱筆) 永祿元年八月六日ニ如此以付番申跡書也

以上

鮎築・又第

一彼方重而付紙ニ鮎築指候事ニ双方より又築指事無是由申事候

ハ

のほり築
措切

一此付紙ニ東林寺より新儀申懸由被申候、相違候、此方築之下ニ彼方より築可指造^(築造之イ)意達候間、相拘御理申所ニ御奉行にて被仰付候間、去年ニ落着と存事

一此儀ハ前と付紙ニて所申候、私之村之定ハ相庄者^(相イ)不存事候

一のほり築、彼方指切由、以外嘘言にて候事

築衆・夜番
分口の魚

一號鮎築此方衆指申由、是又虚訟^(虚イ)事候、其子細者前と付紙以所申候、彼村ニも築衆御座候、中川分を永田方と指候^(指イ)て夜番ニ中川子^(中イ)うほと申者置被申候、則分口の魚をも取行申儀露顯事

知行
川面社頭

一まうと在之事不相紛候ニ養老より以來、川面ヲ近代衆^(近イ)而可有知行儀ハ如何候事

一川面社領者神館方社家知行にてハなき由被申候、其子細彼方へ堅被成御尋候て可被下候、爰以成共御公事可被相究候事

^(朱筆) 永祿元年八月六日又重而東林寺ヨリ付紙如此候

原書

九

一 此付か^(下)ミ無分別候、此方^(下)鯨築指切申しもニ彼方村之築有間敷候、此方築之指樣在之由被^(下)申候、其樣體可^(下)被^(下)成^(下)御尋事

一 東林寺村、去年始而新儀、此方^(下)鯨築ニさゝわり申懸御公事處ニ先御奉行被^(下)下候、重而可^(下)被^(下)成^(下)御糺明由にて當年迄相延候處ニ御公事落居由申上儀、言^(下)吾道斷次第候、以^(下)爰被^(下)成^(下)御分別可^(下)被^(下)下事

一 五ひす講、東林寺衆不存由尤候、しもの築置目定申儀候間、彼方存間敷事

一 のほり築しもにて河幾筋流候へ共前と指切申事無別儀候、殊ニ當春之築迄此方指切申候、於御不審者樣體面と可^(下)申上事

一 鮎築者上ニ御座候、御公事申上候處ニ又築指申、鮎築ヲらんはう申儀一向相違候、御注進申上候間ニ彼築上申候、是等にて被^(下)成^(下)御分別可^(下)被^(下)下候、并

一 三村之内ニ築指人有^(下)是由に曾以不存候事

一 三村之内之名主中ニまうと有由申、四代五代之間ニハ無之候、如此之段、不^(下)入儀被^(下)申上事

築指人

鮎築・又築

五ひす講
築置目
のほり築

社家
河一筋築

一 社家川面知行之由、於地下名主者不存候、きよこんの被^(下)申儀候、御糺明候て可^(下)被^(下)下候、御理可^(下)申上候、河一筋流候年氣ツ指樣被^(下)成^(下)御尋候間、以^(下)別紙申事

〔朱筆〕 永錄元年八月六日重而三村ヨリ如此付かミ

一〇

河一筋ニ流候次第事

一天文十一年寅歲ニ川一筋流申候、築此方ヨリ指切申候、此方築之した魚のほりかたに^(下)彼方築さし候事、曾以有之間敷事

一天文十五年午歲ニも一筋流申候間、同指切申事

一天文廿四年卯歲者二筋ニ流候、兩河共ニ指切申候、殊ニ此方^(下)鯨築之しも近所ニて東林寺村之衆之内ニあミにて鯨かき申候を此方築之衆いわれさる由申候てあかられ候事

右、此等之趣可^(下)然樣ニ御申所仰候

指切
二筋ニ流
あみ・鯨之衆

八月七日

三上 三 村

奥 石 見 守殿
北村與三左衛門尉殿
清水九郎左衛門尉殿

條 二

一 天文十一年寅年、彼方築之置目之由ニテ被出一書令披見候、統築之儀ニ哉、いか様之一書とは不致分別候、如此之書物爲支證公事御糺明之時、地頭領主之御前江被出儀可有其憚儀候か、但神館判形在之由候、次其儀支證と被申候哉、然者幸去年築申事に神館江被成御尋爲誓紙之端作調被參候、以一書是非可被仰付哉事、
一 今度、築之相論爲三村種、被申事候、爲支證被出候書物者、貳村内さへ相違之衆候、殊に妙光村之衆者一人も無之候、如何在儀候哉、其段可被成御尋事、一從最前所申候彼方も築さ、れ候やう可在之候、然ニ三村衆河表築一圓ニ

築之置目

神館

河表築

知行

知行之様ニ被申懸候、東林寺村社家河表築不可存之段、其證跡可被成御尋之事、

一 今度、河表之繪圖、彼方被出候、被越御奉行繪圖させられ候、其面彼方繪圖相違候、數日以後に御奉行被遣候條、水之高下者可有之候、河表者不可有相違事候、然川表所者年々條築も如去年、双方可相指由、御奉行被仰候間、得其意候處ニ彼方無同心候條、此方も相尋可申由、重而事候、條々恣之被申事、如何被思召候哉、此方右之働候者、堅可被仰付候哉事、
一 誓紙之儀被成御尋候、不及其段理非相聞可申候、但子細之段者被打置誓紙を御受ニ候者、不及是非事、

あみ
あめうをかき

(朱筆) 永祿元戊午八月七日ニ川一筋ニなかれ候事、同天文廿四年ニ壹筋ニなかれ候事、同あみにてあめうをかきをおひ上候事、三村ヨリ書付出スニ東林寺村より返越如此候、

三上庄築

二

就三上庄築之儀、靈社起請端作

神館・社家
築ヲ打ツ

一河表神館社家進退候事

一近年鮎築之時分、河二筋ニ流候條、一方鮎のほり候方を東林寺村之衆、築を打候事

一東林寺村不打方之河ニ三村之衆、築被打候事

一東林寺村之衆、築を打候下、鮎（正）のほり、かしら（思）ニ三村之衆、築を被打候儀、

一切無之事

一河進退儀候條、自然河一筋ニ流候時も東林寺村之衆、築の下、鮎（正）のほりかしらニハ三村之衆、築不可在之事

以上

東林寺村衆

右、此旨偽申候者、忝

就三上庄築之儀、靈社起請端作

一河表神館社家衆進退之由被申儀、虛言候、自往古春秋のほりう（意）をハ爲三村知行仕候事

神館

東林寺村社家

鮎

都同（後置）

一河一筋ニ流候時者、河下、鮎（正）のほりかしらニ爲三村之衆、築相打之事

一河二筋三筋ニ流候共、河下、鮎（正）のほりかしらニ三村（數十年）之衆、築を打候、其次ニ東林寺村之衆、築を被打候、春築も同前事

右此旨偽申候ハ、忝

八月

三村衆

一三

三村衆如此御起請かへましき事、付紙候て有之候實書也

靈社起請文端作之事

一河表從往古爲三村之名主進退仕候間、東林寺村社家衆、曾以被存間敷之事
一從往古爲三村鮎築指申人數相定候間、東林寺村社家一切ニ鮎築被指候儀無之事

一春築之儀も從往古先規衆分相定、當春迄爲三村都同仕、指切申候間、東林寺村衆やなされ候儀一切ニ無之候事

右旨一點偽申候者

一四 其方築之儀、重興前種、申、先十日之間、起請文相延候、行末之段者同久□□同
彌兵衛可申候、恐、謹言

九月六日

重

□ (花押)

安

藝

守

□

□

平野道泉

山本甚兵衛尉殿
御宿所

一五

小中路村妙光寺村大中路村衆

(連名十九人分省略)

以上此衆靈社起請文書可被仕之由にて永原殿へ被出候人數
案文也、然共河表從往古爲神領神館殿へ當村社家衆并名主衆御圖次第之定
にて三村依無謂當村江御圖(圖)おり東林寺衆永祿元年午九月廿三日起請書、築
永代知行之者也、爲後日如此書付候ておき候、但シ是はいらぬ物にて候へ共

神領
九月廿三日
知行

三上庄前河表

のほり魚築

後の覺のため如此候

一六

野洲川當庄前河表築相剋之儀 付而

果口次第書注置様體之事

一從去年八月當村衆と小中路村大中路村妙光寺村衆一切のほり魚築之儀
相剋 = 付而從三村衆永原越前守重興江被申候上種、以書付注申事候、何
も當村社家衆并名主都同仕、及度、以一書返答申、明理運ニ相究候處ニ又
三村衆道理之旨ニ負、双方以誓紙河表築之儀一圓ニ書取ニ可仕之由、重興
江被申候ハ、當村衆申様ハ近比誓紙之段迷惑候、於河表處魚築之儀者從
往古爲神領神館方社家進退ニ候、支證共明白之間、歎敷儀と斗迷惑雖申
候三村衆一切ニ清水之所者起請と申懸之條、然上者端作從双方雖被出、其
者善惡之段無果之由被仰、從重興双方之被加御分別、端作被出、憲法之段者
於神前双方之名書御闖入、何方成共道理之方江御闖下候方ニ靈社起請

河表築
魚築
神領
神館方社家

のほり魚

文書、末代河表一切之のほり魚築之事、一圓ニ指切可致知行儀ニ被相定、双方其段ニ請入、去九月廿日ヨリ双方共ニ致精進、同廿三日ニ從重興爲御奉行、永原式部丞方中嶋三郎左衛門尉方南藏人方兩三人被下、於社頭拜殿廿三日夜亥刻時分ニ社僧御圖を被入、以千祓書付候御圖之符をあけられ候へ、當村衆申所依無紛此方江御圖下候、寔以神慮ニ不相違儀、各忝存、右之御奉行衆并從三村も爲檢使、妙光寺太郎兵衛方飯田彌二郎方永田與一郎方南與次方妙光寺士珠被相副候つる處ニ無相違、當村衆靈社起請文名書彌於向後者河表のほり魚春夏秋迄之築、一圓ニ指切可致知行ニ相究候、然者殘四人衆も從三村依違亂精進仕、同廿六日ニ前之御奉行衆三人御出候て山本神兵衛方中村三郎左衛門方平野小三郎方平野小四郎方右之起請文ニ被判形相究候て、其日ニ河表米井之通、五段切ほり下、本川又南川ニ〔注〕くいを打、次之廿七日ニすをひろけ一切ニ指切候也、又北川少な〔注〕かれをも前田村〔注〕〇之通、少下ニくいを切、廿七日ニ兩川共ニ一圓ニ築指切、拾月十五日迄指〔注〕〇致知行候者也、其時三村起請文之上にて相果候間、曾以三村衆無

魚

河表米井ノ通切ほり下

すひろけ

前田村
くいた切ル

此家衆

競望候條、自今以後永代小中路村、大中路村、妙光寺村衆ニ者、縱社家衆在之、共末代築さへせ申間敷候事

一當村衆書候起請文者、永原御奉行右之兩三人文箱ニ入、永原御〔注〕〇〇之箱入可被置之由候て從拜殿直ニ取御備候、何も於永原殿御判仕、公事果口書物者爲此分之由候、萬一相紛儀在之者、何時も有理可被相開候、於向後此趣可有存知候、如此及一大事靈社起請文ニて相究候條、永代於子と孫と三村衆一切ニのほり魚春夏秋之於築者さへせ申間敷者也、當村衆も雖〔注〕〇〇造作仕、樽代も少入候間、此度築衆判形、子孫其一人宛者、永代のほり魚可築指申、其外者一切ニ不可入申候、但爲入供百疋、被出候者各可爲存分次第候事、一尙以右之次第双方ヨリ出候書付共注置之條、可有被見、并河表繪圖從三村築所悉書付、永原殿へ被出候、繪圖ニ〔注〕うら判者、妙光寺五郎左衛門、重綱公文所ニて候間被仕候、彌以此繪圖向後も果口之段無紛儀候、雖然御圖次第ニ永原殿双方仕候て靈社起請文にて相究候條、一切於向後不可有申事候者也、若右之趣、相背者去〔注〕廿三日ニ書候起請文御罰可蒙罷者也、仍爲後日儀依

築衆

入供百疋

御所

前儀定所如件

永祿元戊午年十月廿一日

東林寺助太郎

時

秀 (花押)

(以下十八名省略)

以上拾九人築指衆相定者也

仍條數定所如件

尙以注置次第之事

一就築之儀向後之掟、神館方折紙等迄、（細くカ）〇〇候、右之靈社起請文書候端作跡書、永原殿物書（とうかんカ）とらなくと申仁ニ重興御たのミなされ候而當村江被下、實書も在之、又三村江可被書之起請文之はし作も當村江被出候案文在之、筆者ハ北村進丞方ニ被書、三村江も雖被遣候三村ニ依無理當村江御閣下候條各無別儀起請文書、彌河表一圓ニ築指、永代爲神館方當村衆知行ニ相究候者也

同戊午十一月三日ニ如此注置候也

小林惣

代 (花押)

當村永原殿江之理申奏者ハ北村進丞方一人以申候也、起請書候時、此方進

丞方御出候者也、又三村之永原殿江之奏者ハ北村與三左衛門尉方、奥石見守方、清水九郎左衛門尉方三人也、然共此方依道理、東林寺村衆かち候者也、三村江ハ清水九郎左衛門尉方一人迄、此方へ御出候也、何も右之奏者衆兩人なから永原殿被仰付御奉行衆ニ副、起請書候時者御出候て萬双方江御異見候者也

一七

此右之靈社起請文連判人數、此衆從往古河表小中路村、大中路村、妙光寺迄一圓知行ニ候神領ニてなく候と申かすめ起請文可書之由申され候て此前にも永原殿へ被出候、又永祿元年午九月廿三日ニ於社頭起請文ニ相究候時、又從右之三村衆、此人數可書と申、永原殿へ被出候證文、當村江從重興有實書也、此等筆者ハ妙光寺方士珠と申、徳林寺門（マ）はの僧也、此内ニ社家衆分も候へ共河表神領ニてもなく候、又神館殿社家知行ニてもなく候と起請可申之由被申候間、向後一切ニ縱社家一分ニ候共一切春夏秋のほり魚築さへせまし

神領

神館殿社家知行

春夏秋のほり魚築

き申置文仕候事并はし作も當村書候趣可在之仕候者也、向後若申事在之者能く可有分別事第一候也、爲後日如此書付置候者也

永祿元年十一月三日

小林惣代如此候

此右之連判衆、永原殿へ午九月廿三日ニ自三村衆出候を當村へ有候間、如此注申者也

一八

案文 東林寺方と小林爲兩人（加力）此調參候也、同御折紙をも在之候つる在之也

當庄前河表のほり魚春夏秋築之儀、三村衆と東林寺衆雖相剋候、双方御間ニ成、當村江御間下候間、神慮尤忝存候、然上者爲御公用御費、鯨五畝、毎年無懈怠可致進上候、然上者向後右之築之事、不可有相違候者也、何も申合一圓ニ指切可申候、但春築之事者、枝川又ハ片築等之事ハ（編者、之）爲御一人（成共築可被指者也、仍爲後日如件

永祿元戊午年十一月五日

小吉 規（在判）

のほり魚春夏秋築
公用御費
片築

神館殿
同因幡守殿

人々御中

平野小太郎 時同
定
東林寺助太郎 秀同

一九

猶以かた築指可申候由、満足此事候、以上

今度當庄前河表のほり魚築儀、付而從去年小中路村衆と相剋候、然處ニ我等異見申候へ共三村衆無承引、永原越前守重興江公事ニ被申候處ニ種々雖被加分別、猶清水之段者双方於當社神前、可爲御間次第之由、異見相究、則御間東林寺村江下候、各御誓紙之上者、永代河表春夏秋之のほり魚築之儀、指切可有知行候、然上者此度之築衆人數より外者一切ニ向後餘人被入間敷候、右旨申合、如此上者聊不可有相違候、恐々謹言

永祿元年十一月五日

神清館 長（花押）

かた築
のほり魚築
水原重興
築衆

東林寺村
社家衆井
同
名主御中

同因幡守
清

房(花押)

110

定築置目條々

- 一すくいにけた同前ニ各可被出之事
- 一築指上之時築守觸次第ニ早速仁我人可被出之事
- 一一切魚をぬすミ取候を見付候者永代築衆はつし可申候并すくいにけたぬすミ取候共末代衆は相はつし可申之事
- 一諸夜かねなり候て以後ニ築江我人見舞ニ不可出候同あか月も追出ヨリ前ニ者不可出之事
- 一氷魚すハよこ一間まなかたるべき之事
- 一鮫築之時者すくいにけた六月以前ニきり可有用意すくいのなかさは一間たるへしにけた者あめ築之時者何も木を可被出之事

築置目
すくいに
けた
指上
築守
築衆
追出
氷魚す
鮫築
あめ築

此築置目條々
一すくいにけた同前ニ各可被出之事
一築指上之時築守觸次第ニ早速仁我人可被出之事
一一切魚をぬすミ取候を見付候者永代築衆はつし可申候并すくいにけたぬすミ取候共末代衆は相はつし可申之事
一諸夜かねなり候て以後ニ築江我人見舞ニ不可出候同あか月も追出ヨリ前ニ者不可出之事
一氷魚すハよこ一間まなかたるべき之事
一鮫築之時者すくいにけた六月以前ニきり可有用意すくいのなかさは一間たるへしにけた者あめ築之時者何も木を可被出之事

第五圖 (110)

一すくいにけた我人ぬけかけニ不可取歸各一度ニ沙汰候て可取歸之事
 一我人代ニ出候て一切うをぬすミ取候を見付候者五十文宛可過怠荷之事
付若過怠錢とかく申不出候者すくい押可取之事
 一一切魚少はかりカ度候共可爲圖取万一理不盡ニ取行仁體在之者如右五十文宛可
爲過怠若於違亂者同すくい可押取之事
 右條と定所万一相紛申候者各衆議ニて多分に可被相付者也仍定所如件

永祿貳己未正月廿七日

小

林(花押)

(以下連名省畧)

三

起請文前書遣候覺書事

一神館殿を東林寺村惣としてさし申やなのうちにて小川かたやな御さし
 可申由我等兩人も加判仕候由被仰懸候てやな御上無之候此殘兩人の者
 共ハ少もさやうの加判不仕候若於偽者御起請文可蒙御罰罷者也仍如件

慶長八年三月廿四日

山本ト齋

東林寺梅龍

因幡殿參

三三

覺

當村惣築之事、去永祿拾壹辰歲九月十日三カ日ニ信長様御亂入以來、我人陣在京ニ取紛、皆々無都同故、さし不申候、然者退轉之様ニ罷成ニ付て當年慶長八卯歲ニ雖爲無人申合、築をさし可申と談合相究候、然共河筋野藏前ヨリ去慶長五年子歲以來四五年南河へ付、高野表今井之井口ヨリばら柳林村之田へり土居きわへ流、辻村三味ヨリ少北へなかれ、出庭之三味ヨリ貳町斗北へ河筋通リつぼぶかく候て築之瀬一切ニ無之候、せめて立入井之口ニわろく候へ共一瀬在之條、さし切申候、然處ニ神館因幡清昌□此築之瀬下ヨリ小川一筋北へ流申候を指御切候を當村之者共不相届由申候ニ付て縁者ニ平野小六を以、相届、色々異見雖被申候、清昌さまくまちかい、小川一筋ハ先年三村と築公事在之時ヨリ神館さし可申由當村衆申究、山本市介東林寺助太

當村惣築

永祿十一年

慶長八年

築

慶長五年

つば

築之瀬

築公事

一行
慶長五年
石田三成ノ亂

神館
かた第
大谷道安
惣築

郎平野次郎右衛門など一行在之由被申候間、小六郎申様ニハ其支證在之こそ幸之儀候間、御出候へ、皆々ニ申聞、神館殿御存分のことクニ成可申由、申候處ニ、去慶長五年石田治部少輔亂ニ引失候由被申候間、とかく不謂族候條、承引申間敷と申候處ニ右之書物判形候衆内、死去衆ハ不及是非候、今存命之衆山本市介入道候てト齋と申候、東林寺助太郎も法體候て梅龍軒と申、其兩人生證據候間、兩人右之書物不仕と被申候て神館築をさし申ましき由、因幡被申候而其分ニ候て可爲、尤由、小六被申候而さたのかきりと存なから時分柄候間、申事ニ仕候はんもいかゞニ候間、ト齋ニふせうなから起請文をかへれ候へと申候へハ不及是非と申、宮之庵室まで罷出、因幡守端作を被出候を清書仕、書可申ニ相究候、ト齋起請書候て神□□永代かた築もさへせ申ましきと覺悟をきわめ候つる、其様子を被見知候哉、ト齋起請之事、因幡守めいわくせられ大谷入道道安ハ何と申候や、ともかくも道安異見次第可仕由被申候間、いかゞ可在之候哉と小六ト齋被來被申候間、清昌まちかいたで氣かそこね候つれ共道安宮まで罷出、異見ニハ縦惣築之下ヨリなかる、小川に候共か

すのなき所

築

築衆

神館殿

神主殿

た築之事ハ當村衆ニ堪忍候へ、又神館殿ニも小川たりといふ共御さし切候
 □□無用と申、双方其通ニ同心候條、酒を宮へ取寄互ニ盃之上にて申究候處
 ニ神館かた築申やうニハ御さし候へ共すのなき所ニハ石を御ならへ候由
 にて又若き衆違亂候條、道安堀池又四郎永田大輔兩人を相語、右之約束相違
 候由、因幡守□□申届候へハとかく道安ニ築を見候て異見を申候へと在之
 付て右兩人を道安同道候てやなへ參見申候へハつねのかたやなのことく
 ニさしなをしおかれ候間、此分ニ候へハ最前道安異見のことくニ候間、皆々
 堪忍候へと申究候、其上清昌御親父清長并祖父清房御兩人當村築衆へ明白
 之御書物候間、此以來□神館殿へ不相届族被申候と小六所ニ其書物又ハ先
 年築公事之時之次第證文、重疊ニ在之事候間、何時も披見候て裁許可仕者也、
 今わかき衆、先年築公事之時、當村衆と神主殿間之事、可爲無案内候條、爲後日
 又如此注置者也、仍連署如件

慶長八年卯
 四月廿八日

大谷入道道安 (花押)

〔以下十六名省略〕

史料篇 第二部

兵主神社文書

凡例

- 一 史料は事件別に整理し其上で夫々年月日順に載收した、單獨のもの年號不明のものは適宜推考の上で排列した
- 一 他は第一節凡例に據る

兵主郷・吉川
築・神領・築衆

社領
御供

社家

二三

兵主郷之内、吉川築之事、當社神領者、彼築衆指持人之事候之間、要脚令免除者也、仍狀如件

明應貳
後四月十六日

出 羽 守 (花押)

當
南庄
築 衆 中

二四

當宮社領築事、任先例野洲川流付打築御供可備之、雖爲何之在所、新儀輩堅被停止間、如先々可被申付、由被仰出候也、仍執達如件

天文拾五年八月廿七日

賢 祐 (花押)
高 雄 (花押)

兵 主
社 家 中

二五

延寶七年己未三月七日

近江國野洲郡吉川村

御小物成改御帳戸田左門内

戸田權兵衛

芝浦觀音寺

野洲郡吉川村

上田彌右衛門知行

築役

一貳石

築場持主

築役

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 新 | 仁 | 與 | 市 | 九 | 甚 |
| 右 | 三 | 三 | 郎 | 兵 | 兵 |
| 衛 | 右 | 右 | 兵 | 衛 | 衛 |
| 門 | 衛 | 衛 | 平 | 衛 | 衛 |
| 門 | 門 | 門 | 馬 | 馬 | 馬 |
| 八 | 傳 | 庄 | 長 | 八 | 八 |
| 兵 | 左 | 左 | 兵 | 兵 | 兵 |
| 衛 | 衛 | 衛 | 助 | 助 | 助 |
| 儀 | 儀 | 儀 | 儀 | 儀 | 儀 |
| 兵 | 兵 | 兵 | 兵 | 兵 | 兵 |
| 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 | 衛 |
| 門 | 門 | 門 | 門 | 門 | 門 |
| 藏 | 藏 | 藏 | 藏 | 藏 | 藏 |

築場持主

五條村神主

延寶七年己未三月七日

近江國野洲郡吉川村

御小物成改御帳

戸田權兵衛

芝浦觀音寺

野洲郡吉川村

上田彌右衛門知行

築役

一貳石

第六圖 (一五)

| | |
|-----|----|
| 源加彌 | 庄 |
| 左兵衛 | 兵衛 |
| 衛門 | 衛門 |
| 小六 | 庄 |
| 四兵衛 | 右 |
| 郎衛 | 衛門 |
| 理右 | 庄 |
| 衛門 | 兵衛 |
| 長次郎 | 衛門 |
| 清十郎 | 衛門 |

二六

記 録

近江國野洲郡湖水端一國之中江暉光明を有時者墨闇ともなしたまふ人々
 不思議に思ひ居ル所に五條村之住人井ノ口氏壹人須原村東氏壹人吉川村
 辻氏川端氏廿貳人井ノ口村住人辻氏貳人友なひ右之浦江十月二日より七
 日之間水こりを取籠り如何様之御有様御顯したまると奉祈念然所に同八
 日之夜半之頃御長ケ壹丈余りに御顯レたまひ吾は是大アナムチノ尊なり
 此所を顯ル事天下太平國土安穩五穀成就氏子息災可守御告ケ有り右之
 趣將軍被爲御奏聞に達御社建立可奉仕依旨ニ右之衆中八ッ崎浦江御

此頃
社家役
修理科
神役

社爲御指圖之七日籠リ御祈念仕所ニ五條村之近所に深き淵有、則四町四方其地忽然と松林ニ成り其所に御社 建立仕、兵主太神宮ト奉拜事、今顯然也、則爲御社領と三千七百石從將軍御奇附被爲遊、右之衆申於八ッ崎、每年十月八日ニ水こりを取、天下安全國土安穩五穀成就氏子長久奉祈、則五條村住人井ノ口宰相々官位被下置、右社領之内五百石宰相江被下置、殘廿五人之者共、社家役として四百六拾五石被下置、殘貳千七百石太神宮 修理料に可仕旨被爲、仰付候、右之通、神主社家之者共御神役急度可被相勤事、皆々相守可申候、以上

知行
年老之社家
民主代官役

一 社家廿五人江知行割府之事
右之内、年老之社家七人相定メ其中ニ而二人年老を撰ひ壹老二老と相究メ知行七拾石宛、右之官位之義ハ次第年上り
一 須原村東幡磨兵主代官役として知行五拾石、残り貳拾人、知行壹人ニ貳拾

五石宛

社家仲間
社家子
神役
仲間入
直節・社家役

一 右之年奇社家仲間之内、段々年上りニ而一二之相定メ可仕夏
一 社家仲間代々家次キ可申事、附り男子貳人迄者、社家譲り可申事、曾又男子生レ候節、中間江社家子披露可有之事
一 親相果候節、早々中間江御斷可在之、則御神役五十日之内、中間々相勤可申事
一 五十日相立申上者、中間より御神役相勤被申候段、以夫を可被申渡夏、其上ニ而右之仁々社家仲間入之爲、印與酒五升米壹石貳斗六升相添、中間江可被出事、其上ニ而御神役相務メ可被申夏、但シ何れ茂跡譲り申男子無之、中間と無相談茂他所々養子致シ候ハ、家筋社家役中間江取上可申事
一 養子仕候共、中間江相談之上ニ而七才々内之子、養子ニ致被置候上ハ、右之通、相次を可申事

またげ
備後役
秋葉
築年貢
す・枕
みぶち
築社家役
徳式・神役
家筋一本二相
種ノ

一貳番

拾貳人宛

右之通無相違相動來候事

右之内、またげ壹人、是ハ中間之内、誰ニ而も相果候得者本番江出申事、相果申候者之子またげ相動候外ニ小四郎一人是ハ惣中間之觸流之役ニ而候

一右秋築社番ニ者無之候事

築御年貢貳石六升

右御年貢四分一宰相カ御出し

其外す八枚杭八本ミぶち三本

右之通、宰相毎年御出シ之極メ也

一此度右之通ニ而築社家役相動メ候得共徳式少クニ而御神役難勤リ候故、社家中間之者共五三人茂中役仕候故、彌御神役難務候ニ付此度中間中打寄相談之上ニ而相究メ自今以後右之家筋代々一本ニ相極メ若跡譲リ候男子無御座候而養子致候者中間之内カ養子可仕候、若似合敷義茂無御座候ハ、中間□相談之上ニ而筋目を遂吟味を何方成共養子可仕候、此儀



足あらい

神役・豊老
社家仲間入

馬籠

踏式

ニ付足あらいとして米六斗三升酒五升相添、中間江可被出事、其上ニ而先例之通、御神役被相勤候節、右之通、中間壹老方江社家中間入之爲印、酒五升肴相添可被出事、併社家儀ニ付築漁之義何れ茂我か儘ニ家筋カ他所江譲り又ハ賈買等仕間敷、自然養子仕候儀茂成り不申候者其跡式、中間江預り置、如何様共相斗可申事

右之通、堅相守可被申候、以上

元文三戊午年

九月 日

吉川村年寄一老

川端九郎十郎 (印)

同

辻善太郎 (印)

須原村兵主代官

東新右衛門 (印)

兵主代官

神主・宰相
社家・神事

社領

御供

近江國志賀郡坂本山王十神日吉大明神四月御神夏、二番之申、天下安全之奉祈念シ、依之多方神主通路有之、兵主宰相社家不殘罷越、當日御神夏奉勤、同明ル酉之日、御神事相務候事、其後御社領中絶仕、御神事茂面ニ相勤申様ニ成り候、併御供之儀者一番末之内、社家一老二老代官小四郎宿五人と

本座社家
須原村代官

新平

神役

第

七人之年寄

して御供相勤メ當日日吉大明神江御酒奉指上ケ自古來本座社家廿壹人^(五カ)として先例ニより年老カ段々相務メ廻シ申候、但シ須原村代官、此當日勤メ不被申候、宿之義茂右同前、右社家廿五人之内、新平と申ハ廿貳人之後詰めの役ニ而有之候、依之右之神役自古來勤メ不被申候事、但シ此貳人者社家七人之年寄ニ上リ不被申候、外ニ小四郎家來之役人ニ候

右之通、可被相守者也

一 九月三日より五日迄御神事相務候夏、此神事者古來より御たらし川築繁昌之ため兵主太神宮^(新)カリアケ^(上)太明神^(新)矢ハナシ^(新)太明神江奉祈念、即右神事者惣廿五人之内、拾貳人宛二つに分ケ年老より當番可被相勤事

一 正月三日之内、朝七ツより水こりを取

七人之年寄^(寄)

烏帽子^(寄)
定衣^(寄)

中啓^(寄)
小脇指

残り 拾八人

大誇^(寄)
小

七月七日
虫はし

神主

社家年寄

兵主代官役

此帳面其外社家由緒書證文箱入置キ壹老方へ預ケ置キ錠之義ハ須原村
代官方ニ預之置夕、毎年七月七日ニ皆々打寄リ蟲ほし可被致候、以上

神主 五條村 井ノ口宰相

社家年寄 吉川村 采女(印)

同 川端斗主(印)

須原村 東幡 磨兵主代官役(印)

吉河村 川端九郎次郎(印)

同 村 辻善太郎(印)

同 村 辻與右衛門(印)

同 村 辻七兵衛(印)

同 村 辻次郎左衛門(印)

同 村 辻徳左衛門(印)

同 村 辻次左衛門 此仁元祿年中ニ
中絶仕候

同 村 辻文左衛門(印)

同 村 辻午之助 此仁寶永年中ニ
中絶仕候

同 村 辻庄左衛門(印)

同 村 辻吉兵衛(印)

同 村 辻清左衛門(印)

同 村 川端小三郎(印)

同 村 川端長左衛門(印)

同 村 川端茂平(印)

家來

右之養子仕候事

一家筋中間之内々養子仕候者右之通御座候事、若家筋より外地處より養子仕候義ニ付年上り之事

其身一代蓮中之衆中より年第二なり右之通段々相上り候事、皆々可相守

| | | |
|------|-----|----------------|
| 吉河村 | 辻 | 由之助(印) |
| 同川村 | 川 | 端與藏(印) 此仁新兵衛かふ |
| 同村 | 辻 | 岩松(印) |
| 同村 | 辻 | 平吉(印) |
| 井ノ口村 | 井ノ口 | 重右衛門 |
| 須原村 | 東 | 新右衛門(印) |
| 吉川村 | 小 | 四郎 |

寶永年中ニ養子かふ立不申候所手前同事ニ定り候故其印ニ此かふ有之候

元文四年

延享三年
寶曆二年

築仲ケ間
築
下役
築株

事

元文四年 未五月日

年 寄 川端九郎次郎(印)

同二老 辻善太郎(印)

辻七郎兵衛 延享三年ニ二老ニ上リ被申候 寶曆二年申一老ニ上リ被申候
 辻善右衛門 延享三年ニ壹老ニ上リ被申候 辻德左衛門 寶曆二年申二老ニ上リ被申候

二七

乍恐返答書

一吉川村小三郎々私を相手取御願申上候ニ付今日御召之御裏判頂戴仕奉驚候、然處右築之儀者村方有之、築仲ケ間當時貳拾人有之候處、五人宛四口ニ割合仕、毎年春秋築懸ケ來申候、私義ハ兵主太神宮神領之築頭井口宰相下役相勤申候ニ付右築株之内々茂彼是入組候儀有之候得者私世話仕候處、右壹株五人之内、十右衛門小三郎治右衛門甚左衛門文左衛門都合五人之處、十右衛門儀先年備後福山安部伊豫守様ニ御奉公仕罷有候ニ付右築

第一分

仲ケ間仕法

重右衛門株

仲ケ間式法

重右衛門株

徳用

株之儀、相對之上、小三郎方江讓請候由ニ而則小三郎方江十右衛門ノ讓證
 文取置候旨申候得共十右衛門儀年久敷相成り私共見知不申難得其意奉
 存仲ケ間一統ニ不分明ニ奉存、其上小三郎儀築壹人分所持仕罷在候上、仲
 ケ間江無相談、十右衛門ノ讓請候儀、築仲ケ間仕法ニ茂相背候ニ付去ル丑
 年秋々寅春迄十右衛門株者私預り置相勸候得共小三郎我儘彼是申候ニ
 付寅八月ニ勘定致シ割合壹人分鳥目貳貫文五人ノ仲間ヘ差出シ申候、右
 十右衛門儀、三年以前病死仕候由ニ而悴井口源次與申、去八月福山ノ罷登
 り在所ヘ參、私江築之譯相尋候ニ付右之段ニ申聞候得者仲ケ間式法不相
 立候儀者難致旨を申、小三郎方證文も取戻シ十右衛門築相續仕候段、仲ケ
 間ヘ酒肴等差出シ今日ニ至リ候而者小三郎讓請之譯ハ消申候、猶又小三
 郎ノ差引書仕、源次方江遣シ置候旨を申、私江相渡シ吟味致くれ候様ニ源
 次相頼候ニ付仲ケ間之者共呼寄セ様子相尋申候上ニ而右之私預り居候
 内、徳用割合貳貫文相渡置候も取戻シ源次江相渡、則貳貫文代貳拾八匁與
 又六拾九匁都合九拾七匁相渡并割合三口ニ而四拾七匁是又源次江私ノ

第

相渡、請取書取置申候、然者源次大慶仕、國元江罷歸り申候
 右之通ニ相濟候間、小三郎ヘ讓請候與申築之儀者當時源次所持ニ相違無
 御座候、然ルを又ニ讓證文所持仕候様ニ小三郎御願申上候段、甚不得其意
 奉存候、且又私ヘ銀五貫九百八拾貳匁七りん預ケ居候様ニ申上候得共一
 向覺無御座候、然ル處、右勘定書見候處、貳拾四年以前辰年ノ去寅極月迄ニ
 元銀七拾五匁錢三貫文余都合百貳拾四匁之處、江貳拾四年之利足相掛ケ
 五貫七百六拾壹匁貳分五りん與申上候、并外ニ七百七拾七匁五りん與申
 上候者小三郎勘定之仕方ハ私合點不參申候得共其筋ハ譯相立、則源次承
 知仕罷歸り申候、左候得者右之五貫七百匁與有之候五人仲ケ間江則五百
 匁請取候得者壹人百目宛ニ當り候様に奉存候ニ付十右衛門分百目與申
 儀與奉存候、併廿五匁不足之所、相尋候得者是者十右衛門ノ築もらひ居候
 ニ付小三郎壹人分者出シ不申候與申候、然者貳拾五匁ニ而者四人ニ而百
 目ニ相當リ此員數何分合點參不申候、此段者御吟味奉願候、其上右百目之
 譯、十右衛門借錢ニ而者無之相聞候處を七拾五匁ニ而百匁割與仕候義者

築徳用

築主

仲ヶ間式法

年々利足を五人仲ヶ間之築徳用割合之内江右之割出シ來り候得者今日
 十右衛門方者右之銀子相戻シ候道理與申候ニ付左候得者右之銀子貳拾
 三年之間請取候處者何方ニ候哉與申候得者治右衛門甚左衛門江相渡候
 様ニ小三郎申候ニ付治右衛門甚左衛門江相尋候得者一向覺無之旨申候、
 然ルを此度又々私江右之五貫九百目余を預置候様與小三郎申上候段、甚
 不依存奉驚候、其上私右築取上候様ニ申上候得共築主十右衛門梓源次罷
 登り譯立候上者私掛り合者無御座候、乍恐右之段被爲聞召分御吟味被成
 下重而右築之儀ニ付小三郎我儘不申仲ヶ間式法相背不申候様被仰付被
 下候ハ、難有可奉存候以上

寶曆九年卯三月二日

江州野洲郡
 須原村
 新右衛門

御奉行様

二八

〔表紙〕

寶曆九年卯八月

被爲 仰渡候留書

江州野洲郡兵主
 井口 宰相
 同郡吉川村
 庄屋 太左衛門

申渡

江州野洲郡吉川村
 小三郎
 同國同郡須原村
 新右衛門

右小三郎願出候者江州野洲郡川尻ニ而毎年夏秋兩度ニ築を掛、魚獵渡世
 仕候處、獵師頭下役須原村新右衛門と申者、去ル子年迄者魚代銀割合差越

築主
獵師頭下役

候處、去々丑年の魚賣拂候而も割銀相渡不申候故、彼是と我儘を申罷在難儀仕候、右築之儀ハ銘々中間夫々持有之、壹ツハ小三郎代々相傳リ壹ツハ備後福山家中井口重右衛門と申もの野洲郡井口村ニ罷在候節、所持仕候處、備後表罷下り候後十六年已前小三郎讓り請證文取之、所持仕候處、去ル丑ノ五月ハ兩度之築場江小三郎一向寄付不申、割合銀も相渡不申難儀仕候、其上去ル寅ノ八月ハ小三郎築迄取上ケ及渴命候間、相手新右衛門被_レ召出、獵場江爲立入、割合も別紙目錄之通、無滯相渡候様被_レ仰付、被_レ下度旨申之候

右新右衛門答候者築等之儀者村法有之、築仲間貳拾人有之候處、五人ツ、四ツニ割合、毎年春秋築掛來リ申候、新右衛門儀者兵主太神宮神領之築頭井口宰相下役相勤、右築株之内よりも彼是入組候儀有之候得共、新右衛門世話仕、右壹株五人内重右衛門、小三郎、次右衛門、甚左衛門、文左衛門都合五人之處、十右衛門儀先年備後福山ニ相務及、右築株相對候之上、小三郎方江讓受候由ニ而小三郎方江十右衛門ハ讓請證文取置候旨申候得共、重右衛門儀年久敷相

築場
割合銀
小三郎築
築場
村法
築仲間
神領・築頭
宰相下役
築株

成リ私共見知不申難得其意候、其上小三郎儀築壹人分所持仕候上、仲間江無相談、十右衛門ハ讓受候儀、仲間仕法ニも相背候_ニ付去ル丑年秋ハ寅ノ春迄重右衛門株者新右衛門預リ置相勤候得共、小三郎我儘申ニ付寅八月勘定いたし、割合壹人分五人之仲間江差出候處、右十左衛門儀三年前病死仕候由ニ而悴井口源次と申者去年八月福山ハ罷登リ在所江參リ新右衛門江築譯ケ相尋候_ニ付右之段々申聞候得者仲間式法不相立候儀者難致旨を申、小三郎方證文も取戻し重右衛門築取上申旨、源次儀十右衛門築相續仕候段、仲間江酒肴差出、今日ニ至リ候而者小三郎讓受候譯ハ消江申候、猶又小三郎ハ指引書源次江遣置候旨を申、新右衛門江相渡吟味致吳候様、源次ハ相頼候_ニ付仲間之者共江様子相尋申候上ニ而新右衛門ハ右預リ居候内之徳用割合相渡置候茂取戻シ源次江相渡シ其外差引銀等源次相渡シ請取書取置申候、右之通、相濟候を小三郎江讓受候與申候築ハ當時源次所持ニ相違無御座候、且又新右衛門江別紙目錄之通、銀五貫九百八拾貳匁余預リ居候様、彼是申上候得共一向覺無御座候、仲間之者江茂相尋候得共築主源次罷登、譯立候上者

要一人分
仲間仕法
重右衛門株
仲間式法
重右衛門儀
徳用割合
築主

仲問式法

要條

要職之所務業

獵師司とり候

井口宰相

取引銀

新右衛門懸リ合無御座候間、重而築之儀ニ付小三郎我儘不申仲問式法相背不申候様被仰付被下度申之候

右出入遂吟味候處、右築株之儀、井口重右衛門と申ものカ讓受候由申ニ付十右衛門儀先年致病死重右衛門悴井口源次と申者、當時他國ニ罷在候故、右讓リ證文之儀相尋候處、加判人も無之、父重右衛門茂相果候得者明白成證書と者難セ申之、其上築獵之所務銀之儀、互ニ申争ひ候故、立會勘定申付、是又再三遂吟味候所、少々ツ、双方江受取渡シ可致銀子も有之候、然所全體獵仲間之内、前々申合せを以、致來候取引之儀ニ而一體仲間事之由、獵師司とり候井口宰相并双方獵師共茂申之候、左候得者此銀子受取渡シ之儀、御役所カ之沙汰ニ者不及候條、右之取引銀之儀者先達而之勘定書宰相江差遣候間、宰相差圖を以、小三郎新右衛門其外獵師共納得致し候様可取斗候

一小三郎申立候右讓り證文之儀、前年之證文を以申願、後年之證文を發端ニ者不差出譯、不勝手之儀も有之ニ付右之仕合立會勘定申付候節、消證文を以申立候致方、甚以御役所相願候一埒之内、彼是疑敷仕形、不届ニ付小三

郎儀手錠申付候條、急度相慎可罷在候事

卯八月

右被仰渡候趣奉承知候、以上

寶曆九年八月七日

江州野洲郡吉川村 小三郎

同國同郡須原村 新右衛門

同國同郡吉川村 治右衛門

吉川村 甚左衛門

吉川村 文左衛門

吉川村 政右衛門

須原村 長助

須原村 甚右衛門

年寄 七兵衛

同國同郡五條村
兵主太神宮神主
獵師頭 井口宰相

獵師頭

二九

濟狀之趣ヲ以爲取替證文 噯人方へ

乍 恐 濟 狀

吉川村魚築
御運上米
惣魚築二十株
徳用
築株
築仲ケ間
小三郎築

一江州吉川村魚築之儀、前々御運上米毎年御代官石原清左衛門様江上納仕、魚獵渡世仕候、惣魚築貳拾株之内、貳株小三郎所持仕居候處、六年以前已五月相手之内、須原村新右衛門發頭ニ而小三郎へ難澁申懸ケ壹株之徳用築株共ニ押取候仕方ニ付其節小三郎御願申上候へハ御吟味之上、五年以前卯九月七日 御裁許以後、右築株之儀、宰相否之儀、小三郎江不申渡候ニ付四年半之間、徳用小三郎手ニ入不申難儀仕候ニ付此度御吟味被成下候様ニ小三郎方ハ井口宰相并築仲ケ間新右衛門其外拾五人相手取、御願申上候へ共小三郎築貳株之内、壹株ハ備後國阿部伊豫守様ニ御奉公仕罷

獵師頭
築株
仲ケ間之定
源次築
下作

在候井口十右衛門所持之築ニ而御座候、先年 御裁許之節、立會勘定之上銀子請取渡シ之義ハ不及御沙汰獵師頭井口宰相取斗可申旨被仰付候、右築株十右衛門ハ先年小三郎譲リ受候段申候へ共仲ケ間之定ニ而譲と申儀我儘ニハ成不申候故、右十右衛門死後ハ悴源次築ニ而小三郎下作ニ仕候、然處仲ケ間之内ニ而申分有之候而者互ニ困窮之者共難儀仕候ニ付此度和談取噯之譯、左之通ニ御座候

一 源次築壹ツ

下作 小三郎

内

右徳用

五分ハ

小三郎江取候事

但此譯ハ惣而下作之徳用如此ニ付

殘五分之内

貳分半ハ

宰相江渡候事

但此譯ハ「ハ」株主故源次へ宰相方可相渡候事

貳分半ハ

小三郎江取候事

但此譯ハ前方讓受候と申事も有之候義ニ付

仲ヶ間

一先達而之出入後、四年半之間、右築を仲ヶ間之内ニ而相勤、徳用小三郎江受取不申候と申願ニ付

四年半之譯

株主

小三郎可取等之儀ニ付是々四年半之間、右株主へ可相渡分之貳分半を小三郎方へ取可申候、四年半過候ハ、右之通貳分半株主へ可相渡候、尤宰相ハ可相渡候事

下作

築仲ヶ間

右之通、此度取暖之趣、双方得心之上、互ニ少も申分無御座候、尤此築之儀ハ先年之譯も有之候ニ付いつ迄も小三郎方ニ而下作可仕候、且又後年ニ至り互ニ存入等有之候ハ、築仲ヶ間一統及對談、出入ヶ間敷儀仕間敷候、右之通、相濟候上ハ向後互ニ少も違亂無御座候、依之双方并取暖人連判濟狀奉差上候、以上

上田能登守殿知行所

江州野洲郡吉川村

築仲ヶ間

小三郎

願人願ニ付

代定七(印)

寶曆十三年未四月廿五日

同國同郡五條村

相手兵主神主井口宰相(印)

稻葉丹後守殿領分

同須原村

同築仲ヶ間新右衛門(印)

上田能登守殿知行所

同吉川村

同築仲ヶ間治右衛門(印)

文左衛門(印)

甚左衛門(印)

與惣右衛門(印)

太郎左衛門(印)

利左衛門(印)

淺右衛門(印)

同平藏(印)

獵師頭
重右衛門

築德用銀

源次

重右衛門株
源次
築德用銀

三一

江州野洲郡五條村
獵師頭井口宰相
同國同郡須原村
築德用銀
新右衛門
次右衛門
文左衛門
甚左衛門
此外拾人

吉川村小三郎義井口重右衛門方讓請居候築、須原村新右衛門發頭ニ而築德用割合銀、子築株共押取、五年以前御裁許之上、右出入、獵師頭井口宰相取計可相濟旨被仰渡候處、宰相義、築仲ケ間馴合、築株押へ置、割合銀德用不相渡候旨、今度小三郎代定七奉願候ニ付私共御返答申上候ハ全體右築株之義ハ井口重右衛門株ニ而今ニ重右衛門悴源次所持仕居候旨申上置候ニ付源次築ニ候ハ、源次江德用銀可相渡道理ニ候、五年以來右築德用銀何程有之、源次江相渡請取書ニ而茂取置候哉、年々之銀高井渡方委細書上候様被仰渡候此儀〔以下白紙ノマ、〕

三三

下作應之德用
社法
製作法
配分
持株

申上候者小三郎者下地ニいたし吳候様新右衛門江申聞候ニ付毎年下作通之德用ハ小三郎江相渡其餘德分ハ新右衛門忠左衛門預り置福山江可遣與新右衛門源次江申聞候處強而可請取存寄ハ無之候得共社法ニ應し可申候間いか様共作法ニ取斗吳候様相頼置候旨書上ケ候由尤築作法可相立ため斗ニ小三郎下作ニ立實者讓狀之通小三郎江讓リ可申與急度小三郎江爲申聞候儀ニ而者無之候源次存念者小三郎數年德用仕來候處源次江配分仕候而者小三郎難義可有之父十右衛門築株所持いたし居候と申儀是迄會而不存候程之儀ニ御座候得者此上後急度配分請候ニ茂不及候儀ニ候間福山江差越候ニも及間敷小三郎持株同様ニ支配仕候様小三郎申聞候旨源次書上候由則源次差上候書付本紙御見セ被成一覽仕候處右之通相違無御座候且又去ル卯年御吟味之節新右衛門次右衛門甚左衛門文左衛門差上候御答書ニも小三郎讓リ請候與申儀者心得違ニ而下

支配仕候

持名所

下作附候

德用割合儀

作相勤右築支配仕候へ者申分無之旨申上候上者仲ケ間之者共申分無之小三郎江支配爲致可申候且又源次分德用割合銀之儀者源次伯父井口村忠左衛門并新右衛門兩人請取世話仕吳候様去年申置罷歸候得共以來者銘割合銀受取印形取置可申積リニ御座候得者何方江相渡候而も不苦儀ニ候間小三郎請取印形仕候ハ相渡可申旨書上置候其節小三郎も請取印形可仕旨書上置候右之通御座候得者右築持名所者源次ニ而小三郎者下作ニ而右築支配仕候得者小三郎方ニ而下作難○候得者外江下作附候共支配仕候上ハ小三郎心任之儀ニ而勿論右築德用割合銀之内下作江可請取分者小三郎江受取其餘德用も不殘小三郎江相渡請取書取置候得者源次小三郎與之差引之儀者私共差構無之筋ニ者無御座哉之旨御吟味被成候

此儀〔以下白紙ノマ〕

三三

〔立會勘定目録〕 寫

吉川村小三郎 須原村新右衛門 獵場割合銀立會勘定目録

一銀七拾五匁 仲ケ間中へ借り請銀割合十右衛門分百匁之内
治右衛門甚左衛門文左衛門三人江預り高

一錢三貫七百五拾文 元文元辰年春築割合錢
十右衛門分右三人江預り高

代銀五拾貳匁五分

右貳口新右衛門江預り罷有之

一銀五貫六百拾匁八分 右貳口之利足銀辰年去寅年迄
貳拾三年之間壹ケ月壹割半之積

三口ノ五貫七百三拾七匁五分八厘

三四

右銀高十右衛門ノ貫ヒ置候故、新右衛門ノ請取申度申上候得共新右衛門此

〔立會勘定目録〕 寫

吉川村小三郎 須原村新右衛門 獵場割合銀立會勘定目録

一銀七拾五匁 仲ケ間中へ借り請銀割合十右衛門分百匁之内
治右衛門甚左衛門文左衛門三人江預り高

一錢三貫七百五拾文 元文元辰年春築割合錢
十右衛門分右三人江預り高

代銀五拾貳匁五分

右貳口新右衛門江預り罷有之

一銀五貫六百拾匁八分 右貳口之利足銀辰年去寅年迄
貳拾三年之間壹ケ月壹割半之積

三口ノ五貫七百三拾七匁五分八厘

三四

右銀高十右衛門ノ貫ヒ置候故、新右衛門ノ請取申度申上候得共新右衛門此

外三人之もの共々ハ銀高も相違仕、其去年十右衛門悴源治罷登リ請取歸
り候旨ニ而新右衛門方ニ受取書も所持仕候旨申上、私へ十右衛門ノ貫ヒ候
と申證據も無之候ニ付、〔家ノ〕申分ケ難立段、得心仕罷在候

小三郎

一銀六拾四匁

右者 丑年春築割合承請取内之銀子相渡不申候

小三郎

右銀高相違仕、割合壹人前貳拾貳匁宛ニ相當り外ニ十右衛門悴源次江仲ケ
間ノ渡シ内之銀子有之候處、有銀無之ニ付組合四人配分を以、源次方へ相渡
候ニ付銘ニ受取銀者無御座候、併四人配分銀を以、源次方へ之渡銀ニ仕候段
小三郎江相對不仕候義、私共不至之儀ニ御座候間、割合貳拾貳匁ハ相渡し可
申候、尤小三郎申候と銀高相違仕候儀、獵場入用銀之内、小三郎不得心之拂有
之旨ニ而其分を相除、割合仕候ニ付銀高多相成申候、獵場入用之儀ハ仲ケ間
一統之儀ニ候間、小三郎も遁申間敷儀と奉存候

狩獵割合

一銀六拾四匁

右者丑年春築割合源次分、右銀高源次ハ貫置候故、請取度旨申上候得共新右衛門此外三人之もの共ハ者壹人前廿貳匁ニ而則去年源次へ直ニ相渡候旨申之、私方ニハ源次ハ貫置候ト申證據ハ無御座候_(三)付此儀ハ御願申上候存念無御座候

新右衛門
治右衛門
甚左衛門
文左衛門

小三郎

一銀三拾壹匁四分壹厘

右者丑之秋寅之春兩度分百五拾七匁五厘私不得心之入用拂銀有、銀高之内ニ而引取、右殘銀を以、割合ニ仕候ニ付私不得心入用之分、五ッ割右銀高之通請取申度奉存候

秋築
狩獵場

右拂銀之儀者獵場ニ而仲ケ間一統入用之儀ニ候得者小三郎へ懸ル間敷道理者無御座候間、小三郎儀も相懸リ候様被_(二)仰付被_(一)下度奉願候

新右衛門
治右衛門
甚左衛門
文左衛門

小三郎

一銀三拾壹匁四分壹厘

右者前段ニ申上候小三郎同様之儀ニ而丑年秋築、寅之春獵場ニ而源治へ掛間敷拂を有銀高之内ニ而引取候殘銀を以、割合ニ仕候由ニ御座候故、源次へ懸間敷拂之分、右銀高之通、五ッ割源次分、是又私へ貫置候_(三)付請取申度旨申上候得共仲ケ間江割渡し候割合銀四拾七匁ニ而得心仕、去年源次受取濟候請取書も有之候上者此儀者御願申上候存念無御座候

小三郎

仲ヶ間代參
伊勢參宮

一金貳步

代□拾匁

右者 仲ヶ間代參として伊勢參宮致し路銀小三郎ヶ扣銀、右之通、相違無御座
仲ヶ間ヶ小三郎江立内之銀子、勘定之上、双方共得心仕罷在之

小三郎
新右衛門
治右衛門
甚左衛門
文左衛門

一銀拾六匁八分

右者 小三郎下作三左衛門、兵助兩人江仲ヶ間より貸銀高相違無御座候、兩人
ヶ小三郎方へ取立、仲ヶ間へ立内之銀子、双方共得心仕罷在之

新右衛門
次右衛門
甚左衛門
文左衛門
小三郎

下作

獵場

一銀三拾壹匁貳分

右者 小三郎へ獵場ニ而仲ヶ間ヶ貸シ之旨申上候得共、小三郎儀覺無之旨申
之、無證據之儀ニ付申分難相立段、得心之上、御願申上候存念無御座候

三五

〔前圖〕

立會勘定節、私共ヶ書付差上置義、今以違變申義者無御座候、併シ右之通ニ而
小三郎得心仕候得共其節下濟可仕義を小三郎不得心故、御裁許被爲遊候
與奉存候、何分私共心得違と申義ハ小三郎ヶ差上候讓狀ニ付源次被申上候
者加判人も無御座、父十右衛門印形手跡等茂○定、親十右衛門渡置候證文と
も不申上、其上私共奉存候者金子ニ而買取候譯、仲間定メニも賣買不仕候與
申定、印形小三郎仕置候故、右證文相立間敷義と小三郎奉存候而貳通有之候
證文壹通ハ勝手ニ文言ヲ消シ奉差上候故、右消證文故、相立不申候上ハ右十

徳用銀

右衛門築ハ源次と相對仕候而徳用銀茂去ル罷〇リ相對之上、所務銀之義ハ源次被吳候故、先年出入入用相濟候迄五七年之内者被下候與申候得ば尤成事故、徳用有之候ハ、差遣之可申候間、左様ニ相心得罷在候

三六

乍恐奉願口上書

江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主

井口宰相

徳用・神儀

一當國野洲川筋築獵之儀者往古々當社爲神獵、御小物成貳石六升宛、毎年當

社家

御役所江上納仕、私始メ社家貳拾余之もの共獵俄渡せ仕、毎月朔日廿八日

御供魚

ニ神前江備江乍恐、御代長久氏子安全之願上仕候義ニ御座候、然ル處、築

下川水別流ニ罷成、中瀬と名付、凡地面貳反余之洲寄有之葭草罷在候ニ

付吉川村々日と大勢刈取ニ入込候人音船音不絶、依之魚追下ケ漁義無之

渡世難儀仕候、全體御小物成上納仕候□中、儀ニ御座候得者全私共請所と

御所

小物成神儀之

小物成儀・神

奉存候得共、右場所之御小物成者上納不仕候ニ付、渡船通行仕候義、差留メ

兼、通行爲致心儘候故、只今ニ而者田畑等開發仕候場所相見へ申候、然者次

第二通行多罷成候而者御小物成神獵之築相續不仕及渴命可申哉、與甚歎

敷奉存候、右場所當時御見分被成下私共江新開被、仰付下候ハ、御小物

成築私共神役相續仕候儀〇せ之難有可奉存候

右奉差上候通、少茂相違無御座候間、何卒御慈悲を以、御見分被成下相應之御

年貢上納仕場□私江新開被爲、仰付下候ハ、難有可奉存候、以上

寶曆九年
卯十月

野洲郡五條村
兵主太神宮神主

井口宰相

石原清兵衛様
御役所

江州野洲郡吉川村

庄屋

年寄

百姓申口

同國同郡五條村

兵主太神宮神主

井口宰相

吉川村地先野洲川尻附洲新開畑ニ者開發可相成場所ニ御見立被成候ニ付
 差障リ之義古田者勿論村方共指障リ候義一切無御座候旨書付差上候ニ付
 場所委細御改被成大繩四町步余畑方ニ開發可相成候依之私共被召出吉川
 村者地先之儀右川筋者井口宰相御請負築獵場湖水端者吉川村御運上獵場
 御座候間村方并ニ宰相申合獵場江茂不差障様開發可仕候自然外村請開發
 被仰付候而者作場江船ニ而通ヒ候故右獵場江相障リ候ニ付御請難仕候私
 共江御請負被仰付候ハ御請可仕候尤堀溜池ニ而も仕可成丈田方ニ可仕
 旨被仰聞候處荒川末附洲故滿水之節者湖水湛ヘニ而押揚水損所御座候得

井口宰相御請
負獵場
吉川村御運上
獵場

積下年季
地代銀

川筋御運上場

共水干落候時者水懸リ無御座田方ニ者難相成候開發之義何分外村請被仰
 付候得者右御運上獵場江指障リ末ト出入止事御座有間敷候間私共御請負
 可仕旨申上候處歟下年季地代銀等御吟味御座候
 此段前書ニも申上候通荒川末附洲御座候間歟下年季五ヶ年御免被成下
 地代銀者壹ヶ年ニ四拾匁宛五ヶ年ニ貳百匁上納可仕旨申上候處猶又被
 仰渡候者平地之義ニ候間歟下年季を縮地代銀も可相增旨御吟味御座候
 平地ニ者御座候得共荒砂之義ニ付開發人夫も多相掛リ急ニ者地馴不申
 候間年季縮地代銀相増候而者御請難仕旨申上候處何分右之通ニ而者御
 伺難被成段再應御吟味無據奉存候間歟下年季壹ヶ年縮四ヶ年御免被下
 地代銀者壹反歩ニ付拾匁宛之積リ四百匁當辰々未迄四ヶ年ニ上納仕來
 ル申年檢地御高入被仰付候様奉願候此上地代銀相増年季縮候而ハ御請
 難仕候間願之通被仰付候様仕度奉存候私共江開發被仰付候得者川筋御
 運上場等少茂差障無之様ニ仕候依之宰相并村方申合御答申上候
 右御吟味ニ付申上候處相違無御座候以上

辰
二
月

江洲野洲郡吉川村

政右衛門印

年寄 次郎左衛門印

同 長助印

同 七左衛門印

頭百姓 彦右衛門印

同 半左衛門印

同 四郎右衛門印

同 淺右衛門印

同 與惣右衛門印

同 七兵衛印

三八

覺

江州野洲川尻附洲

一新開反別大繩四町步余

當辰方未迄御下四ケ年御免
來ル申年檢地御高入之積リ

此地代銀四百目者

當辰方未迄四ケ年之内壹ケ年ニ
百目宛上納可仕候

右者先達而御見分之上、町步御改被成開發御下年季地代銀共御吟味之上書

石原清左衛門様
御役所

同郡五條村
兵主太神宮神主

同 惣四郎印

同 彦左衛門印

百姓代 喜右衛門印

井口宰相印

川筋者井口宰
相願御運上候場

面之通ニ而開發被仰付被下度旨書付指上候ニ付御伺被成下候處右之通開發被爲仰付候段御下知相濟候ニ付右地所此度猶又御改之上御渡被下難有奉存候然ル上ハ早束取掛リ隨分出情仕開發可仕候尤湖水之内江押出候附洲御座候得者滿水之節ハ水押等茂可有御座候得共水干落候得者水掛リ無御座候故田方ニハ難相成候然共右附洲之内ニ而堀溜池等仕水掛リ出來仕候ハ少ニ而も田方ニ相成候様可仕候

一先達而御改反別大繩四町步余御座候處堀〇所等迄開發仕候ハ五町步程ニ茂可相成旨被仰聞承知仕候

一右場所川筋者井口宰相請湖水端者吉川村請御運上獵場ニ御座候間作場江舟ニ而通イ候共相互差障ニ不相成候様可仕候

一右田差障リニ相成候普請等一切仕間敷候

右之趣委細被仰渡承知奉畏候地所御改御渡被下候上者早速取掛リ隨分出情仕開發可仕候依之御請連印一札差上申候以上

江州野洲郡吉川村

庄ヤ政右衛門

同彦右衛門

同四郎右衛門

年寄次郎右衛門

此外九人印形

同國同郡五條村

井口宰相

寶曆十年辰六月

石原清左衛門様
御役所

三九

覺

一銀百目者

右者新開場地代銀辰年分相納所仍如件

巳二月

石原清左衛門
役所 (印)

地代銀

江州野洲郡
五吉
條川

村村
年庄
寄屋

四〇

一札之事

一其元様御願請被成候新田開發之儀、拙者引請候ニ付左ニ究之趣書記進申候
 一當已々來西迄五ヶ年之内ハ、御公儀様御年貢斗拙者方々其元様江相渡
 シ可申候、猶亦五ヶ年之内ニハ新田場反別御改可被成候、其節ハ御改入用
 相掛リ可申候、此儀茂拙者方々相賄可申候、併過分入用ニ候ハ、少々ハ御
 了簡頼入候事

一五ヶ年之季相濟申上候〔者〕御改請候反別壹反歩ニ付納米貳斗宛相渡シ可
 申候間、御公儀様御年貢ハ其元様々上納可被成候事

一新田地馴立毛も宜出來仕候ハ、米貳斗之外、少々ニ而茂年貢相増、隨分御
 爲ニも相成候様出情可致候事

右之通、御互ニ相究申上者永々私支配可仕候、若違變有之候ハ、此書付
 を相改可申候、爲後日仍一札如件

寶曆十一年巳九月日

吉川村
辻 太左衛門
同村請人
辻 甚左衛門

五條村
井口宰相様

四一

一札

一野洲川尻新開場所、當巳九月々來ル酉年迄五ヶ年之内、大津御役所江差上
 候御年貢并入用銀年々請取、右之場所、其元江當テ置申候處實正也、尤右之
 年季相濟候後者壹反歩ニ付納米貳斗之積りを以、當テ米取立、其許江可被
 遣候、右之場所、後々宜敷地所〔ニ〕相成候者隨分年貢増シ候様被成可給候、右
 之場所、永々其元江支配下當テ一節御頼御預ケ申候、仍而爲後證一札如件



寶曆十一年
西九月

吉川村
築惣番衆中

五條村
兵主神主 井口宰相

右書其村多左衛門江遣シ置候通り寫渡シ候間、隨分間違無之様ニ御出情可
給候、仍而如件

七話人須原村
東 新右衛門

安永四年
申小春日

四二

乍恐御訴訟

願人 江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主 井口宰相

相手 同州同郡吉川村
上田彌吉様御知行所 彦右衛門

御手洗シ川
小物成
下役神職
懸ケ懸ケ

同州同郡津田村
御同人様御知行所
庄屋 只

八

一近江國野洲川之儀者當兵主太神宮御手洗シ川ニ而往古カ御小物成米貳
石ツ、御上納仕、右川末於吉川村領私下役神職之ものカ築ヲ懸ケ獵稼仕
來申候、然ル所、右川筋カ瀬ヘ押出し候土砂之附洲出來仕ニ付去ル寶曆九
卯年、右之由縁を以、太神宮長久之助力と奉存、私カ石原清左衛門様御役所
江右場所新田開發之儀奉願上處候、則御聞濟有之、右御役所御懸リニ而御
手代大鳥多吉殿谷宇平次殿御出役被成、委細御見分之上、無程新田開發仕
候、然ル處、私身上段ニ不如意ニ相成候ニ付所持之品共、追々賣拂、其後安永
八亥年右之新開所も無據當分之儀と存、本元返シニ差入、銀子壹貫六百目
此度相手親彦右衛門カ借用仕、則同人カも追而銀子返辨之節者右地面無
滞私方ヘ差戻し可申旨之儘成書付取之、右之通、銀子壹貫六百目借用仕候
處、無程年限ニ相成候ニ付右銀子返辨可仕様ニ御座候處、先彦右衛門儀死
去仕、當時彦右衛門儀者其頃ハ若年ニ付跡庄屋太左衛門と申ものヘ銀子

返辨致度旨申し候處、委細承知ニ者候得共何分當人之彦右衛門儀死去仕候事故、何れ急ニ者埒明不申由、挨拶有之候得共前書之通、急度本元返シニ差入候儀ニ者相違無御座、殊更爲後證、慥成一札取置候事故、銀子さへ返辨仕候得者何時ニ而も右新田者手ニ入可申と存、其儘差置候内、彼是年數も余程相立ニ付又候銀子調達、右太左衛門へ度々懸合、別而三四年以前者嚴重ニ應對仕、借用金者返辨致候間、新田者此方へ差返し吳候様、頻與相頼候得共兎角彼是と申延し埒明不申候處、太左衛門儀も去巳年又々死去仕候^(二)付其以來無據一札之加判人津田村只八と申ものへ相懸り段々趣意相懸合候處、稻葉丹後守様御領分井口村半次と申ものを以、申越候者此上右取替銀壹貫六百目之外ニ尙又爲樽代金子六兩差出可申候間、右新田者何卒先方へ譲り切ニ致吳様申越候得共其儀ハ決而難相成、何れニも銀子返辨いたし可申候間、地所者此方へ可差戻與再三應種々様々懸合見候得共、何分埒明不申、彼是仕候内、又々兩三年も年數相立候儀ニ而最早私儀も及老年存命之境も難斗、悴之代ニ相成候得者双方互ニ死期ニ成行候

總代

總代

事故、彌以先方新田ニ成行、扱々歎ケ敷儀ニ御座候、然レ共右體延引相成候段□私も不調法奉忍入候儀ニ御座候得共前文之通、重立候彦右衛門儀死去仕、其上神役相勤罷在候私儀ニ付出入ケ間敷儀者餘リ不相好可相成儀ニ御座候ハ、何卒下ニ而埒明可申と身命可續□□色々と懸合見候得共此上者所詮下ニ而□□様も無御座候^(三)付乍恐奉願上候、前文之通、右地所之儀者全私開發仕候新田ニ而□□ニ江戸表迄も私名前者被達御聞候程之儀ニ而通例所持之田地と違、私開發之地所ニ付別而歎ケ敷奉存候^(二)付則別紙新田開發一件書物□先方々差越置候一札之寫奉入御高覽候間、此段被爲聞召分御慈悲之□□を以、當時彦右衛門津田村只八被召出、借用之銀子壹貫六百目、先方へ請取之地所者此□へ差□し吳候様被爲仰付被下候ハ、廣大之御厚恩、生々世□誠以難有仕合奉存候、依之乍恐此段奉願上候、以上

寛政十年六月

兵主太神宮神主

井口宰相

御奉行様

四三

乍恐御訴訟

根來右京殿知行所
兵主太神宮神主
井口宰相

上田彌右衛門様御知行所
同州同郡吉川村
百姓 彦右衛門

同斷

同州同郡津田村
百姓 唯 八

私儀無據銀子入用之義有之、相手唯八世話を以、當彦右衛門親彦右衛門の安永八亥年銀壹貫六百目借用仕候節、引當として私所持野洲川築洲新田書入置候様被申候〔三〕付當分事と存、先づ五ヶ年季と仕、本物返シ證文ニ而新田畑不殘書入、則世話人唯八受人ニ相立吳、尤右新田畑私の年來下作人江宛置候義ニ御座候得共右借用之砌の入魂合を以、下作之ものを毎年来拾俵ツ、彦右衛門方へ相渡、同人の御年貢も拾俵之内の世話いたし相納メ貰、殘米を利

築洲

下作人

年貢

利足
徳用
小作人

足ニ遣シ凡年分ニ六俵程、彦右衛門方徳用ニ相成候義ニ而右拾俵ハ彦右衛門差圖ニ而則小作人の吉川村問屋伊左衛門方へ相渡シ最早是迄銀主方徳用高凡米百貳拾俵程ニ相成申候、右之仕合ニ而新畑元銀相立、私方へ取戻可申所、先彦右衛門相果、追日年季も相立候様可相成ニ付當惑仕、吉川村庄屋太左衛門へ右之趣及相談候所、右一件之義ハ帳面等太左衛門方ニ預り罷在候〔三〕付氣遣ひ之義ハ無之、たとへ年季滿候而も畢竟本物返し借用銀之義ニ而田畑譲り證文とハ譯も違ひ候へハ何時成リ共銀子調達次第、本銀相立候へハ證文取戻シ相成候事ニ而彦右衛門方ニも毎年来受取候へ者是又損失無之事故、一異義可有之筋無之旨申聞吳候ニ付尤之義と存、其後色々銀子才覺仕、漸近來元銀調達もいたし候〔三〕付相手當彦右衛門ハ養子ニ而受人唯八ハいまた存命ニ有之、殊ニ吉川村大庄屋も相勤罷在候〔三〕付段々及應對、唯八も俱々彦右衛門へ元銀相立候ハ、證文差戻し之義、申聞吳候へ共外ニ銀主等茂有之、何角入組候譯合共御返趣申、早速埒明不申、彼是と延引仕候ニ付追々催促仕候所、唯八并同郡比江村庄屋九右衛門□之及挨拶ニ、此度相改、右田

畑私に譲り切に付候ハ、金子貳拾兩樽代として當時引受世話人吉川村當庄屋二郎三郎を爲差出可申旨申之○候へ共新田畑不殘と書入置候義故、左様と仕候義ハ歎敷、勿論元銀相立、取戻シ之義ハ私最初之念願に付是迄段々懸ヶ合罷在候義にて此上追々年月押移候内ニハ又ハ古人之もの出來仕候而ハ猶更手遅れニ相成、歎敷奉存候に付猶又段々懸ヶ合、何卒元銀之外ニ銀子百文相添可申間、證文差戻し吳候様相頼候へ共兎角等閑にいたし引延シ于今埒明不申難義至極仕候に付不得止事、此度乍恐御出訴奉申上候、先彦右衛門并庄屋太左衛門存命ニ而有之候者ケ様ニ故障無之、早速元銀さへ相立候へハ相戻し可被、吳處、右之仕合迷惑仕候、尤前書毎年拾俵つゝ小作人ハ相渡候義ハ問屋伊左衛門方へ向、相納候事故、聊龜抹之義無之、先ン方ニ而入組有之候義者不奉存候へ共問屋方帳面通りも有之候義、銀主方ニ聊も損失有之筋之義ニ而ハ一向無御座、平均下直之米直段ニ積候而も小三貫目ハ先キ方徳用ニ相成有之候義ニ御座候へ者何卒御慈悲之御憐愍ヲ以、相手當彦右衛門并唯八共本人直々被召出元銀相立候上ハ不實不申、證文相戻し吳候

寛政十三年十二月

訴訟人 井口宰相

御奉行様

四四

様被爲仰付被下候ハ、如何斗難有仕合可奉存候、以上

兵主神主

被遣候得ば延引相成候而も彦右衛門方ニ差支候筋茂有間敷、流地ニ先方より望候ハ挨拶茂可有之筈、且又先達古作人貳拾人之者共夜中呼寄、彦右衛門○廿人之内四番ケ年寄罷出、庄屋彦右衛門被申聞候ニ者今度兵主神主井口宰相頼に付銀子壹貫六百目用達致候、古作被致候新開御年貢米下當拾俵宛宰相殿へ遣シ候通、銀子返辨有之迄彦右得門方へ則太左衛門方へ遣シ又庄屋太左衛門方へ茂遣候、又者治郎右衛門へ遣、今ニ而も伊左衛門へ遣シ候、又者銀子壹貫六百目差越候者地面宰相へ相渡し○可申旨被申聞候ニ付毎

年豐惡之無左別作徳之内拾俵私方相渡し候處拾俵宛請合差出し來り候
 得共新開キ質銀代金子三拾壹兩庄屋多左衛門江遣シ置候義者於村方ニ面
 立候者共者存罷在候條然ル所本元返シ年限立候ハ數多御座候得共本元返
 シ之銀子返濟致シ候上私欲を以彼是申義も有間敷處其斷なく庄屋太左衛
 門申之ニ付等閑ニ致置候處右太左衛門義去ル已年死去仕候ニ付無是悲其
 後者加判人津田村唯八江段之右之趣意掛合候處稻葉丹後守様御領分井口
 村半治與申ス者を以申越候者此上猶又爲樽代與金子六兩差遣シ可申候間
 右新開所何卒先方へ譲り切ニ致吳レ候様申越候ニ付其儀者難相成いつれ
 ニ茂銀子返辨致地所ハ此方江差戻可申由再三應種之懸合見候得共何分埒
 明ケ吳レ不申私もはや及老年ニ萬一死去之程茂難斗悴之代ニ相成候得ハ
 双方互に死跡ニ成行候事故彌以新田ハ先方之地ニ相成扱之歎ケ敷作附仕
 候下役廿人ノ銀代口出シ候儀者相手之者共存罷在候難相立尤是迄段之延
 引ニ相成り候段者全不行届儀於私ニ茂不調法之儀御座候處前文ニ申上候
 通り元來彦右衛門其外吉川村面立候者私入魂ニ御座候所親共死去仕候故

下段

神

手後レニ相成其上神職相務罷在候私儀ニ付氏郷之者ヲ相手取出入ケ間敷
 儀茂餘り不相好可相成義ニ御座候者何卒下ニ而埒明ケ可申與身命可續丈
 ハ色々與懸合見候得共埒明不申此上下ニ而致方茂無御座候右申上候通銀
 子返辨之○延引相成り候段於私ニ茂不行届儀ニ御座候所右地所者私所持
 之新開ニ者全相違無御座候則別紙入御高覽ニ候新開書物并先方ハ差越候
 一札先方江遣シ置候證文之覺書此段聞召被爲分ケ御慈悲之思召を以當時
 彦右衛門津田村唯八被召出借用之銀子取之地面ハ此方江差戻し吳候様被
 爲仰付被下候ハ廣大之御慈悲生々世々誠以難有仕合與可奉存候以上

四五

乍恐奉願口上書

一同郡吉川村百姓彦右衛門同津田村庄屋唯八相手取田地本物返シニ而借
 用仕候銀子壹ノ六百目相立右田地證文取戻之義奉願則當十六日對決之
 上證文年限相濟

有之候得者田地取戻候様ニも難被爲^{ツシクカ} 仰付間、下ニ而對談もいたし遣候様、相手方江御理解被成下難有奉存候、依之罷り歸り候上、段□□引合候得共御裁許相濟候由ニ而不敢^セ候^ニ付私義も是迄等閑ニ仕置候段者不念ニ奉存候^ニ付○○を附ケ元銀之外ニ新ニ此度銀五枚相添可申旨、證文差戻吳候様、色々相頼候得共一圓取敢吳不申候、前書之通、等閑ニ仕置、今更申上候義、奉忍入候得共右田地之義者元來寶曆年中兵主太神宮調進之野洲川築場築洲新開之義、私より奉願上^ニ石原清衛門様御役所ニ而御吟味之上、江戸御勘定所江も被^レ仰立被下御下知之上、御免被成下候地所之義ニ而一通り之地面と者譯も違ひ候得共無據義有之、本物返シ之證文仕、銀子借り受候義ニ御座候所、年限切候得共先方ニも催促も不致元銀調達仕兼候^ニ付元入并利足ニ米相斗り置候所、最早年數も立候事故、殘銀も段々減少仕候^ニ付殘銀相立、證文取戻し申度奉存懸合候所、差滯候^ニ付奉願候義ニ御座候○是迄等閑ニ相成候^ニ付前書之通被^レ仰渡候義を又候御願申

上候義、其以奉忍入候得共元銀壹^六百^四圓^四之銀子ニ而米を段々相斗置候得者自然と元銀減シ有之候所、右銀子ニ而先方江地面渡候義も敷ヶ敷、私義心願在、兼而既ニ右本物返シ之地所者當テ作仕置古^心作人共より之證文者私所持罷在候得者正しく先方江不讓渡地面之證據敷と乍^心忍奉存、且今以右地所名前切替相改不申候所、證據□□奉存、旁以敷敷奉存候^ニ付今一應□□被成下度、則爲取替證文猶又奉差上、不願恐御歎奉申上候、何卒御慈悲之御憐愍を以、相手方之もの共被召出御理解被成下候へ^心如何斗難有奉存候、以上

四六

□川村野洲川尻築洲新開願出候者
 □九己卯年々同拾年辰二月
 本元返シ證文
 □永八亥年正月日銀子壹^六百目也

返シ證文

□亥々來卯年迄年季五ヶ年相定
 □洲新開所預り置候本證文之通銀子壹□六百目御返濟被成候ハ、右之地
 面不殘□□返シ可申、尤銀子返濟被成候者□季内ニ而も御返シ可申候、爲念
 仍而□□證文如件

安永八年亥正月

吉川村

彦右衛門印

津田村

唯 八印

五條村

井口宰相殿

四七

乍恐奉願上候書付

根來
 江州右京知行所
 兵主野洲郡五條村
 太神宮神主
 井口宰相

井口宰相

築漁惣司

築上

御座

社家下役廿人

一私儀往古々野洲川筋築漁惣司ニ而下役貳拾人之もの差配仕、同郡吉川
 村之内、野洲川尻ニ而築漁渡世仕候ニ付右爲御運上、毎年米貳石ツ、貳拾
 人之ものを取集、代銀ニ而相納、則當御役所先ニ御懸屋大和屋惣七船屋
 三郎兵衛御用相勤候節迄ハ私直ニ右御懸屋迄持參仕來り候處、遠方態ニ
 上津仕候儀も難溢ニ付風、與吉川村取次相頼、其度々鳥目百文ツ、差遣御
 用御永納來り候處、いつ與なく取次與ハ不相心得當時ニ而者私々當
 御役所江直納ニ者難仕様成行、殊ニ近年右御運上之儀者吉川村御地頭上
 田彌右衛門方江一旦相納、御同家々當御役所江上納被致候様被申聞候、
 畢竟御運上之儀ニ付何方江上納仕候而も損益ニ不拘儀ニ御座候得共私
 獵之儀者往古々格別由緒有之、太神宮長久助力之儀ニ而乍恐私儀者御諸
 向様ニ而も被達御聞社家下役廿人之獵頭ニ御座候ニ付右之通先ニ
 當御役所表江御運上直ニ納來り候處、當時ニ至り御私領表江上納仕候
 様成行候而ハ家格ニも拘り敷ケ敷儀ニ御座候、□上吉川村與ハ先年少々
 爭論之筋有之候、□付御地頭上田彌右衛門殿御方江納候而ハ彼是差また

け故障之筋合も有之、又候爭論之基ニ相成候而ハ、双方迷惑仕、其上右之通
□□^{之方}廉相立候獵頭之私ニ御座候得ハ、何卒已前□通、當御役所江已來ハ私
方直ニ相納候様仕度奉願上候、左候ハ、何事も入組候儀共無之、御厚恩之
程、誠以難有仕合奉存候、依之乍恐書付を、以奉願上候、已上

兵主太神宮神主
井口宰相(印)

大御津役所

四八

口上書

野洲川尻築之儀ハ、當社舊式ニ御座候而私惣司ニ而下役廿軒之者共差
配仕、則漁魚、太神宮江供御調進仕、乍恐、御代長久之祈願仕來り候處、此
度吉川村役人中、村方之御小物成場所ニ而私共儀ハ出作下作、^{氏子村}申立、吉
川村仲ヶ間之者共江種々申懸候得共、氏子村之儀ニ候得者、爭論仕候而ハ

一野洲川尻築之儀ハ、當社舊式ニ御座候而私惣司ニ而下役廿軒之者共差
配仕、則漁魚、太神宮江供御調進仕、乍恐、御代長久之祈願仕來り候處、此
度吉川村役人中、村方之御小物成場所ニ而私共儀ハ出作下作、^{氏子村}申立、吉
川村仲ヶ間之者共江種々申懸候得共、氏子村之儀ニ候得者、爭論仕候而ハ

仲間之者共

供御調進之御
神事

御小物成

不本意、且御由緒被成下候對、御屋敷様恐入候儀御座候得者、何卒熟談仕
度、依之別紙之通、認メ連印致吳候様相頼候處、村役人被申候者、私共儀ハ一
同ニ承知仕候得共、御陣屋様思召如何可被爲在候儀、難斗^{一應}相窺、其上何
れ共可仕旨、申聞之候故、一昨晝時迄御陣屋表江御伺有之候ハ、晝後私も
御陣屋表江罷出、猶又御願可申上趣、示談仕罷歸候而晝後私儀ハ、御陣屋
表江參上仕候處、吉川村未參上、不仕旨被仰聞候得者、示談之趣、私ハ申上御
願申上置罷歸り候處、夕方ニ至り吉川村仲ヶ間之者共五人、年寄彦右衛門
宅江呼寄、私江示談仕置候儀、不承知ニ候故、其旨私江通達可致旨被申聞之
候、尤最初私ハ示談申候趣ハ拙者共儀ハ致承知罷在候得共、御陣屋表江
御伺可申上旨差申置、約諾之通、參上も不仕、彼是齟齬之儀、返答仕候始末、何
分難得其意、心底與被存候、右躰之儀ニ而ハ此上如何様示談仕候とも下ニ
而熟談相調不申候ニ付、不得止事御敷申上候儀ニ御座候、前段之通、私共出
作下作、^{氏子村}心違致罷在候而ハ、太神宮供御調進之御神事退轉仕候様
成行候而ハ、何分敷ケ敷、神慮之程、恐入候、全躰築御小物成之儀ハ畢竟私

方上納候也。御屋敷様御差障リ筋ハ決而御座有間敷候儀と奉存候、何卒已來私方上納仕候儀ヲ彼是故障不申懸候様、御利解被仰下置。太神宮供御調進無恙永世仕度、別而從御公儀様先年御觸書ヲ以被仰渡候通、神事怠慢仕候而ハ奉恐入候儀ニ付此段御賢慮被成下、願之通、御聞届被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

文化五辰年三月

井口宰相印
後見 井口勇助

西村多三郎様

四九

口上書

根來喜内御知行所
近江國野洲郡五條村
兵主太神宮神主 井口宰相

一江州野洲川之儀者從往古 兵主太神宮由緒御座候而 上田彌右衛門様御

供御
下役之者・小
吉川村御所
出作
神役・築株
神人之株
供御之御神事

神人
築株
兵主之築
村御所

知行所同國同郡吉川村地先ニ築と申魚獵場御座候、則漁魚當社江供御仕、餘り候分ハ賣拂、私始メ下役之者共神役相續仕候、右御小物成上納之儀吉川村世話ニ而納來候處、此度吉川村同村地内ニ有之候獵場故、吉川村請所ニ而私儀ハ出作と心得、神役離れ候事と申立、右築株ハ神人之外江も可致賣買旨申之候ニ付、神人之株と築之株與離れ候而ハ供御之御神事怠轉仕、神人之株茂次第ニ減し行々怠轉可仕、左候得者神慮不叶、且從御公儀被仰渡候御趣意ニも不相叶奉恐入候ニ付、吉川村御領主上田彌右衛門様御陣屋役西村多三郎江右之趣相談仕候處、書面を以、申出候様被申聞之候ニ付、別番之通、認メ差出候處、早速取斗可申管ニ存候得共、江戸表江一應相窺、其上取斗可申聞、暫猶豫可仕被申聞之候故、猶又相頼ミ申置候然ル所、上田家御領分内ニ罷居候神人之者共、不殘右御陣屋へ出候様被申付候ニ付、則罷出候處、右御役所江壹人ツ、呼出、多三郎被申聞候^(奥方)者、吉川村築獵場之儀を兵主之築と神主申出候、其方共同心有之候哉、吉川村請築獵場與申請印可仕哉、與被相尋候ニ付、往古ハ仕來り之儀ニ候得者、神主同意ニ而

御座候與申候得者十手ニ而打其上ニも請印難澁仕候者四人迄後手鎖之上、入牢被申付候故、殘拾人ハ無據請印候處、他參留メ被申付置、右ニ付扱吳候者、追々有之候得共私ハ心得違與申一札差出候ハ而者出牢も不相成、勿論神役ニも罷出候儀差留メ被置候ニ付差當リ去ル四月例年之御神事怠慢可仕之處、産子村之者共種々心配致吳候故、乍内分も罷出候而假成ニ間ニ合セ神夏ハ相務申候、是迄ニも京都御奉行所へ御訴訟可申上ト奉存候得共上田家ハ從御先祖御代々當社御崇敬被爲、在其上私江も御由緒等被成下候事故、右様之儀ニ付御名前 公邊江出候儀ハ何分敷ケ敷、且御先祖様始メ彌右衛門様へ奉恐入候ニ付此度參府仕、右之通、口上ヲ以、上田御屋敷江御敷申上候處、此表御役人中ハ御知行所吉川村地所一圓ニ相掛候趣被申聞之候ニ付私ハ申候者大津表石原清左衛門様御役所之御振合并御小物成上納之儀も其年之上納銀之外ニ百文ツ、相添、吉川村請所之御小物成上納之御用序ヲ相頼ミ納來候儀ニ御座候得者御地所一圓相拘リ候義ニ而ハ無御座候間、今一應書面を以、御願申上度段申候得者御役人中

神役

神事

小物成上納儀

被申候ニハ陣屋表多三郎ハ添翰無之儀ハ難取斗、猶又多三郎親多右衛門此表ニ詰居候得者面會可致之旨被申聞候而則多右衛門罷出、面會仕候處早速歸國之上、多三郎江心得違ト申一札差出、吉川村方江□同様斷申候得者早々夏濟可致、被申聞之候、私ハ是迄右築株ハ外々江致賣買候儀ハ無之候處、此度吉川村ハ新規ニ神役與築トハ譯違候事ト申懸候ニ付無據御敷キ申上候段申候得者多右衛門申候ハ寛永十二年上田家江御納領之已來ハ吉川村之物故、賣買可致筈ニ有之、且又神役之儀ハ神主持前之事ニ而百姓ニ無之事、被申聞之候、右多右衛門義ハ兵主隣郷ハ出候者ニ而國元之儀ハ委敷乍存知居右様不筋之儀ヲ申候段、同人一己之存寄ト被相察候、一鉢 兵主太神宮産子村十八ヶ村有之、諸御領主御入合ニ御座候得共村々仕來之神役ハ相務候義ニ御座候、右ニ付是迄神夏ニ付故障等出來候節ハ御領主江申出候得者御領主ニ而相濟候義ハ何方様ニ而も古來ハ仕來通被仰付候儀ニ御座候、然ル處、此度右御屋敷ニ而御聞濟不被成下候而ハ 當社之御神夏、銘々心儘ニ相成、乍恐 御代長久御祈願之御神夏、

集株

神役

産子村

神事

供御之儀

神役

怠轉仕候儀者眼前之儀ニ御座候得共不得止事御訴訟仕候外無御座候、左候而ハ御由緒□存御陣屋表江願出、其上遠路罷越候趣意も不相立何分歎ケ敷奉、存候前段之通、從往古持傳居り候供御之獵場ニ候段□既ニ寶曆十辰年中大津表御役所ハ被仰渡右村方ハ其節御請一札差上候旨ニ而御下ケ被成下所持罷在候義故、此度願之通被仰付被下度、且又神役之儀も從先年御觸書を以被仰渡候御趣意并外御領主御振合通、古來ハ仕來之神役相務候様仕度、彌右衛門様ニ而前文之通、御聞濟不被成下候御様子ニ候得者無據、公訴仕候心底ニ御座候得共困窮之私、失脚ニも難澁仕候得者此段被爲聽召分、彌右衛門様御聞濟被下候様、御實慮之程、偏ニ奉願上候、以上

文化五辰年七月

江州野洲郡五條村兵主太神宮神主

井口宰相(印)

五〇

江州野洲川之儀ハ、兵主太神宮御手洗川ニ而同川尻ニ打築漁魚、太神宮

打築
漁魚御儀

氏子

小物成

下役之者

江調進仕、乍恐御代長久□子安全之祈願仕來候、右御小物成上納之儀、御知行所吉川村世話ニ而納來候處、數年ニ成候得者自然吉川村御小物成場所ト申様成行候而ハ舊式ニ茂欠、神慮ニも不相叶候儀ニ御座候、若心得違仕及爭論ニ候様成行候而者、氏子村ト申、別而從御屋舖様ハ往古ハ御代ト御由緒被成下候御知行所吉川村之儀ニ御座候得者歎ケ敷奉、存候間、右御小物成私方ハ上納仕候様、何分仕度、左候得者私始メ下役之者共諸事往古通ニ而相續仕、勿論吉川村ニおゐて差障り無之儀ト乍案奉、存候間、此段宜被達、御聽私ハ上納仕候様御執成可被下奉願上候、以上

五一

不申候間、以來者一統之義ニ付銀差出、差出し不申候分江利銀差加江當時差出し可申旨、其上築株之義者兵主社ニ相拘り候義ニ無之候間、何致候而も不苦、抔與理不盡之儀申募り候間、神役相勸候者

築株
神役

禮儀、吉川村
祝之持

小物成

下々作

儀持

兵主社請持場

小物成

共助成を失ひ難儀仕候段、私方江申出候ニ付早速私義吉川村庄屋治郎左衛門方江罷越、前書漁場之儀者吉川村請持場與心得候哉、又者兵主社之持與兼而心得候哉與相尋候處、右漁場之儀者吉川村地先ニ有之殊更御小物成之儀□□方江取立相納來候ニ付私并同郡須原村新右衛門義ハ下々作ニ有之候旨申之、既ニ淺右衛門築株等も先年村方江取上筈に候得共是迄勘辨を以、差免置候得共以來者村方江取上可申、并與治郎左衛門義我意之趣申聞ケ候處前書ニも奉申上候通、右漁場之儀者往古々兵主社請持場ニ而往古々之書物等も有之候上者御公訴仕候外無御座候得共何共奉忍入候儀ニ有之、尤右鉢及爭論候者漁場御小物成之儀者村方江相頼置候故之儀ニ付以來者先規之通私方々直々上納可仕旨、治郎左衛門江申聞ケ候、尤之儀ニ有之由申之、既ニ熱談仕候、然ル處、其節同人義私江申聞ケ候者拙者共儀者一同承知仕候得共御陣屋江一應相窺候上、取極可申段、示談仕、既ニ當三月十三日村方之者共并私儀御陣屋江御窺ニ罷出旨、約諾仕候間、私共右同日夕八ツ時頃、御同所江罷出候處、吉川村之者共相見江不申候ニ付御陣屋役人西村多三郎江面談仕

禮儀

儀持

兵主社之持

神人

神事

吉川村之者共罷出候哉與相尋候處、未罷出不申旨被申候ニ付私義吉川村治郎左衛門與示談仕候趣、多三郎江申談候處、書面を以、申聞ケ候様被申談候間、相認可差出、與歸宅仕候處、其夜ニ相成、吉川村々對談之趣、不承知之旨、破談申來間、無據同月十五日右之始末相認メ書面差出し置申候、其節多三郎私江被申聞候者、江戸表御屋敷江相窺候上、沙汰可致旨被申候處、如何成存寄ニ候哉、同月廿五日右神役相動候者共拾四人不意呼出し地頭所之權威を以、右築場之儀者吉川村請所之趣、相違無之旨之書付可差出旨被申付候得共元來右築場之義者兵主社持之儀ニ候得者右體之書付難差出段申之候由、右之段不埒之旨ニ而神人治右衛門、淺右衛門、清右衛門、角平右四人之者共後江手鎖之上入牢被申付候間、残り拾人之者共其儀を恐、請印仕候處、他參留被申付置候、尤例年四月五月兩度兵主神事御座候ニ付既ニ當四月神事以前ニ相成候而多三郎江面談仕、一件之儀相尋候處、築場之義者吉川村請所ニ而儘成證據同村々差出し候ニ付吉川村請所ニ相違無之、且又答メ置候者共兵主神役相動候者之由申候得共當方江兼而届ケも無之候ニ付以來神役ニ差出し候儀、決而

御奉行所

不相成旨被申候間、私義相答候ニ者右神事之儀者是迄何レ之御地頭江も御届申候儀無之、尤古來々仕來之儀ニ有之、且又築場之義も住古々兵主社請持之場所ニ而古來々書物も有之候間、此儀者追々御吟味被下候而先ツ神事之儀者無滞相勤り候様、御取斗ひ被下候様申談候處、我意而已ニ一向取敢不被申、勿論私茂心濟ミ不致候ハ、多三郎私兩人ニ而京都御奉行所様江罷出御利害可承旨、同人被申候間、其趣ニ取極メ罷歸り、則氏村之内、宮元四ヶ村江右之趣申談候處、四ヶ村之役人中、彼是心配致吳候而右之者共々多三郎江相歎候得者、郷中々書付差出し候ハ、他參を留置候者共差免し内々ニ而神事ニ罷出候義、吟味致間、數旨被申聞候處、差懸り候儀ニ付多三郎存寄之書付差出し去ル四月五月之神事者假成ニ相勤候得共、元來多三郎神事ニ罷出候義差留置候故、七夕之神事ニ者吉川村神人共不罷出、今以怠慢仕、神慮ニも不相叶、先年重き御觸通し之御趣意ニも相背ケ奉恐入候ニ付、何卒御慈悲を以、相手西村多三郎被爲召出仕來通り神事相勤り并ニ備魚永世仕候様被爲仰付被下置候様奉願上候、以上

御奉行所

寺
御奉行所様

文化五辰年 月

五二

乍恐以書付奉願上候

一神供漁場差障出入

御朱印地
江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
白川家神職
訴訟人 井口宰相

代
幼年ニ付後見
同人伯父 井口勇助

御朱印地
江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
白川家神職
訴訟人 井口宰相

代
幼年ニ付後見
同人伯父 井口勇助

ニ彼は妨ケ致間舖旨申聞候得共不筋斗を申承引不仕候ニ付無詮方吉川村之儀者上田彌右衛門様御知行所ニ而殊ニ當社江ハ格別御由緒茂有之候故御陳屋役人西村多三郎江右之趣書附を以相歎候處私江ハ御主家江可相窺旨申置如何之了簡ニ候哉右村方神役相勤候拾四人者共不殘呼寄地頭所之權威ヲ以右場所吉川村請所之趣書附可差出旨被申之候ニ付左候而者難澁之趣相歎候處右之内四人者後口手錠之上入牢被申付候故残り拾人者共其儀を恐無據請印仕候處他參止被申付候右躰新規義ヲ私等儘之取斗被致候而ハ神役相勤候者共自然與致減少神事差支且者社用并臨時用向等之節手支ニ相成甚難澁仕候ニ付以御由緒を上田彌右衛門様江相歎候處多三郎ハ之添翰無之候而者御取用ハ難被成旨役人中ハ被申渡其上多三郎父多右衛門義當時江戸詰ニ而私心得違ハ之趣多三郎方江一札差出し候ハ、右四人者共出牢いたし神事も無滯動り候様可相成杯與以之外之儀被申聞不實千萬ニ奉存候得共無是悲罷歸り猶又多三郎江再應引合候處色々申延し漸々右四人内貳人者先月下旬出牢いたし手錠ニ而村預ケニ相成候由ニ御座候

得共右一件之儀者其儘捨置、一應之答も不仕、先月晦日御陣屋出立御當地上田彌右衛門様御屋敷江被相越被罷歸候義ハ際限無之由ニ御座候、左候得者神夏ハ勿論社用等ニ差支前々御觸通之御趣意ニ茂相背ケ且者神供調進之規矩相定不申神慮之程奉恐入候、如何斗敷ケ舖奉存候間、何卒以御慈悲ヲ右之段ニ被爲聞召分ケ多三郎御召出之上、御吟味被成下置、神役相勤候者共早々答メ差免し重而漁場之儀ニ付故障不致候様被爲仰付被下置候ハ、冥加至極難有奉存候、以上

文化五辰年
九月廿三日

御朱印地
江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
白川家神職
訴訟人 井口 宰相 (印)

寺社
御奉行所様

代 幼年ニ付後見伯父
井口 勇助 (印)

白川家神職

神役

神供調進

五三

乍恐以書付奉願上候

根來喜内知行所
江州野洲郡五條村
御朱印地
兵主太神宮神主
井口宰相幼年ニ付代
訴訟人 井口 勇助

一神事差障出入

御寄合
上田彌右衛門様御家來
相手 西村多三郎

右訴訟人井口勇助奉申上候、兵主太神宮之儀者江州野洲郡之内、拾八ヶ村之産神ニ而往古々産子村々百姓之内ニ神人株御座候而神事其外社用等之節ハ右之者共罷出相勤來、且又供御調進之儀ハ往古産子村々之内、吉川村地先ニ魚漁場有之築を懸致魚漁當社江持參リ調進仕、餘分之魚ハ右之者江差遣無恙神役相續仕罷在、則右之者共儀を築衆と唱江來、勿論右魚漁場之儀、古來ハ當社請持ニ而御小物成も吉川村築衆神人共江私々相頼、御代官御役所江

神人株
神事・社用
供御調進
魚漁場
神役
築衆
當社請持
築衆神人

神人
社用御儀

御儀
兵主御持場
御儀

神役

兵主社之持

小物成

出作
淺右衛門築株

上納仕來申候、然、處、當二月中吉川村庄屋次郎左衛門方江右村方ニ罷在候神人共呼寄、兵主社用懸銀等有之候節者此村之一同々入用割合差出來り候處、神人共儀者是迄相除有之候儀、如何成譯合ニ有之候哉と相尋候處、神人共相答江候者往古々右築場之儀ハ兵主請持場ニ而則同社之神人ニ而築株之者者差出不申候仕來之旨申之候處、一體築場之儀、吉川村地内ニ有之、村中百姓共一圓之事ニ候得者相除可申譯ハ相當リ不申候間、以來ハ一同之儀ニ付出銀差出し候様可致、尤往古々差出し不申分江利銀差加、當時差加可申旨、嚴敷申渡、其上築株之儀、兵主社ニ相拘候儀ハ無之間、何れ江致買賣候而茂不苦杯與理不盡之儀申募り候間、神役相動候者共、助成失ひ難儀候段、私方江申出ニ付、早速吉川村庄屋次郎左衛門方江罷越、前書魚漁場之儀ハ吉川村請持場與心得候哉、又者兵主社之持與兼而心得候哉、相尋候處、右漁場之儀者吉川村地先ニ有之、殊更御小物成之儀、茂村役人方江取立相納來り候ニ付、私井同郡須原村新右衛門出作有之候旨申之、既ニ淺右衛門築株等茂先年村方江取上可申、答之處、是迄勘辨を以、差免置候得共、以來ハ村方江取上可申、杯與次郎左衛

御儀
兵主社御持場

小物成

神役
御儀
吉川村御所

門儀、我意趣申聞候處、前書奉申上候通、右漁場之儀者往古々兵主社請持場ニ而古來々書物等も有之候上ハ御公訴仕候々外無御座候得共、何共奉恐入候儀ニ有之、尤右體及爭論候者魚漁場御小物成之儀ハ村方江相頼、上納仕候故之儀ニ付、以來ハ先規之通り私方々直々上納可仕旨、次郎左衛門江申聞候處、尤儀ニ有之由申之、既ニ熱談仕候、然ル所、其節同人義、私江申聞候者拙者儀ハ一向承知仕候得共、御陣屋江一應相窺候上、取極メ可申段、示談仕、既ニ村方之者共井私儀御陣屋江御窺ニ罷出候旨約諾仕候間、私儀ハ御同所江罷出候處、吉川村之者共相見江不申候ニ付、御陣屋役人西村多三郎江面談仕、吉川村者共罷出候哉と相尋候處、未タ罷出不申旨被申候ニ付、私右次郎左衛門と示談仕趣、多三郎江申談候處、書面を以、申聞候様被申談候ニ付、則相認メ可差出與歸宅仕候處、其夜相成、吉川村より對談之趣、不承知之旨破談申來り候間、無據右之始末相認メ書面差出置申候、其節多三郎私江被申聞候ハ、江戸表御屋敷江相窺江候上、沙汰可致旨被申候處、如何成存寄ニ候哉、右神役相務候者共拾四人不意ニ呼出、地頭所之權威を以、右築場之儀、吉川村請所相違無之書付可

兵主社持
神人
神事
齋場
兵主神役
兵主社請持
氏子村
宮元四ヶ村

差出旨被申付候得共元來右築場之儀ハ兵主社持之儀候得者右體書付難差出段申之候由右之段不埒之旨ニ而神人次右衛門淺右衛門角平清右衛門右四人之者共後手錠之上入牢被申付候間殘拾人之者恐其儀請印仕候處他參留被申付置候尤當社神事之儀例年四月五月兩度御座候故既ニ當四月神事以前相成候間多三郎江面談仕一件之儀相尋候處築場之儀ハ吉川村請所ニ而慥成證據同村々差出候ニ付吉川村請所ニ相違無之且又答メ置候者共ハ兵主神役相勸候旨申聞趣ニ付當方江兼而届ケ茂無之候ニ付以來ハ神役ニ差出し候儀決而不相成旨被申候ニ付私儀相答候ニハ右神事之儀是迄何れ之御地頭江茂御届申候儀ハ無之尤古來々仕來儀ニ有之且又築場之儀も往古々兵主社請持之場所ニ而古來々書物等も有之候間此儀ハ追々御吟味被下候間先神夏之儀無滯相勸候様御取斗被下候様申談候處我意のミ申之一向取敢不被申勿論私儀心濟不致候ハ多三郎私兩人ニ而京都御奉行所様へ罷出御利害可承旨同人被申候間其趣ニ取極メ罷歸則氏子村之内宮元四ヶ村へ右趣申談候處四ヶ村役人中彼是心配致吳候間右者共々多三郎江相

神事
吉川村神人
供御調進

敷候得共郷中々書付差出候ハ他參ヲ留置候者共差免し内々ニ而神夏ニ罷出儀吟味致間敷與被申聞候處差懸候儀ニ付多三郎存寄之書付差出シ去ル四月五月神夏ハ假成ニ相勸申候ニ而以御由緒を上田彌右衛門様江相敷候處多三郎方之添翰無之候而ハ御取用難被成候旨役人中々被申渡其上多三郎父多右衛門當時江戸詰ニ而私ニ心得違之趣多三郎江一札差出候者神事も無滯相勸候様可被成杯與以外義被聞不實千萬ニ奉存候得共無是悲罷歸猶又多三郎江再應引合候處色々申延右一件ハ其儘ニ捨置御當地彌右衛門様御屋敷江被罷越候前段申上候通神事ニ罷出候儀差留置候ニ付吉川村神人共不罷出候ニ付七夕之神夏今以怠慢ニ仕神慮ニ茂不相叶先年〇〇御觸通之御趣意ニ茂相背ケ奉恐入候ニ付何卒以御慈悲相手多三郎被爲召出仕來通り神事相勸并供御調進永世仕候様被爲仰付被下置候様奉願上候以上

文化五年 九月

根來喜内知行所 江州野洲郡五條村 御朱印地

寺社 御奉行所

兵主太神宮神主
井口幸相幼年二付代
訴訟人 井口勇助

五四

乍恐以添書奉願上候

一神供漁場出入初發之儀者吉川村庄屋次郎左衛門ハ神人共江申候ハ社用掛リ銀其方共儀如何之譯ニ而相除キ有之候哉と相尋候ニ付往古ハ築衆神役相勤候故不差出候趣神人共ハ申候處神役相勤候故右掛リ銀相除有之候と申候儀相分リ候得共築衆故不相掛候と申候得者不相分全體築場之儀者吉川村一圓之事ニ而候得者築衆故不相懸杯と申候得者不埒ニ付往古ハ出不來候銀高利足勘定可致旨申之候ニ付神人共申候ハ右築場之儀ハ兵主社請持と私共儀ハ心得罷在候と申候得者庄屋次郎左衛門申候ハ兵主神主須原村新右衛門儀者下作ニ而有之候故神供之儀心儘之事と

神供漁場
神人
社用掛リ銀
築衆神役

兵主社請持

下作・神供

神役

築場

請所

當社請持

神人

申候ニ付神人共私方江罷越申聞候ニハ右吉川村庄屋次郎左衛門申候趣有之候得者以來是迄通神役動兼候旨相歎候ニ付早速吉川村江私罷越庄屋次郎左衛門江面會仕如何之事ニ候哉と相尋候處次郎左衛門申候者右築場之儀者吉川村地内ニ有之且又御小物成之儀も吉川村ハ取立相納候得者同村之請所ニ無相違儀ニ候得者神人淺右衛門築株既ニ先年村方江取上可申筈是迄差免置候得共此後ハ村方江取上可申と申候ニ付右場所之儀ハ當社請持候段者吉川村勿論兵主郷内誰不知者も無之程之儀ニ付殊ニ往古ハ書物等も有之候者乍恐御公訴仕候外無之左候得者産子村と申別而當村御領主ハ格別當社御崇敬被成□ニ候得者歎ケ敷且又神慮も恐入候ニ付種々申入候得者漸得心いたし候ニ付御上納之儀ハ是迄ハ神人共江相納させ候得共以來ハ是ハ相納可申段對談仕候處拙者共儀ハ一同承知いたし候得共御陳屋表江罷出一應可相窺旨申聞候ニ付左候ハ是ハも御陳屋□出御頼可申入と示談仕則御陳屋江私罷出多三郎江面會仕吉川村罷出候哉相尋候處未々參上不仕旨申被聞候得者示談之趣私

神役 申入相頼候處、書付を以可申出旨被申聞候故罷歸、右其夜吉川村々示談
築場 仕置候儀不承知候旨申越候ニ付無據右始末相認メ差出候處、私江ハ御主
神事 家江□相窺旨乍申置如何□了簡ニ候哉、右神役相勤候拾四人之者共不殘
兵主之神役 呼寄、地頭所之權威を以、右築場、吉川村請所之趣、書付可差出旨被申付候ニ
神役人 付左候而ハ難遊之趣、御答候處、右之内四人ハ後手錠之上、入牢被申付候故、
常社開持 殘拾人之者共恐其儀請印仕候處、他參留被申付置候故、去ル四月例年之神
神役人 事前ニ私多三郎江面會仕候而右一件之儀相尋候處、築場之儀、吉川村請所
兵主之神役 二而慥成證據、同村々差出候ニ付吉川村請所ニ無相違且又咎メ置候者共、
神役人 兵主之神役相勤候由申候ニ付當方江届無之神役人以來差出候儀不相成
常社開持 旨被申聞候故、私々相答候ニハ右神事之儀者是迄何方江茂御届ケ申候儀
神役人 無是古來々仕來之事候得者是迄通御取斗可被下候、且又築場之儀ハ往古
常社開持 々當社請持之儀ニ付古來々之書物等有之候間、御調之儀ハ追々致被吳候
神役人 而先咎メ差免され是迄通神事相勤リ候様御取斗頼度段申入候處、是々申
常社開持 立候儀、一向取敢不被申先方勝手ノミ申被居其上 御奉行所様江双方可

齋子村
四月神事
七夕之神事
吉川村神人

齋子村 罷出旨被申聞其趣對談仕、罷歸候而産子村之内、宮本四ヶ村江右之始末申
四月神事 談候處、四ヶ村役人中色々心配いたし吳候而右役人中々相歎候得者郷中
七夕之神事 々書付差出候ハ、他參留之者共差免候間、内々神事罷出候儀、吟味致間數
吉川村神人 旨、申被聞候故、差懸候儀ニ付多三郎隨意之書付差出、去ル四月神事、假成相
齋子村 勤申候處、七夕之神事ニ吉川村神人共不罷出今以怠慢仕有之、何分其儘不
四月神事 被差置候ニ付無據今般奉願上候、何卒相手多三郎、吉川村庄屋次郎左衛門
七夕之神事 年寄彦右衛門、同甚兵衛其外神人共一同被 召出、古來之通、神事相勤候様
吉川村神人 被爲 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

御奉行所様
寺社
 文化五辰年九月廿九日

御朱印地 江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主 白川家神職
訴訟人 井口宰相 (印)
代 幼年ニ付後見 右同人伯父 井口勇助 (印)

五五 乍恐奉願口上書

氏神
神人株
神事・社用
供御調進
祭
神人株之者
神役
當社調持場
常社調持場
小物成
祭場
調進殘之魚

一當社之儀者同郡之内拾八ヶ村之氏神ニ而往古々氏子村々百姓共之内ニ
神人株ト申神事其外社用等之節者右之者罷出相勤候仕來ニ御座候且又
當社江供御調進之儀者往古々氏子村之内吉川村地先ニ魚漁場有之築を
掛右村方并外村神人株之もの共代ルニ魚漁いたし日々當社江持參り調
進仕餘分之魚者右之者共へ差遣無恙神役相續仕罷在則右之者共を築衆
神人と相唱來勿論右漁場之儀者古來々當社請持場ニ而御小物成之儀も
吉川村築衆神人共江相頼毎年石原庄三郎様御役所へ上納仕來申候然
ル處當三月吉川村庄屋申出シ候ハ右築場之儀者同村地内ニ有之候故吉
川村請所ニ付いつれへ致賣買候而も不苦杯と申理不盡之取斗ひ仕候故
左候而ハ神役相勤候者共助成を失ひ難澁仕候由私方へ相敷候(ニ)付早速
村役方へ罷越前書之譯合を申殊ニ神役相勤候者へ別段役料差遣候義も
無之調進殘之魚を以神役相續爲致勿論御代官様々之御書附等も有之候

神役
神事
社用

得者新規ニ彼是妨ケ致間數旨申聞候得共不筋斗を申承引不仕候ニ付無
詮方吉川村之義者上田彌右衛門様御知行所ニ而殊ニ當社へハ格別御由
緒も有之候故御陣屋役人西村多三郎殿へ右之趣書附を以相敷候處私江
へ御主家へ可相窺旨申置如何之了簡ニ候哉右村方神役相勤候拾四人
者共不殘呼寄地頭所之權威を以右場所吉川村請所之趣書附可差出旨被
申之候ニ付左候而ハ難澁之趣相敷候處右之内四人者手錠之上入牢被申
付候故殘拾人之者共其儀を恐無據請印仕候處他參留被申付候右躰新規
之儀を我儘□取斗ひ被致候而ハ神役相勤候者共自然と致減少神事差支
且者社用并臨時向等之節手支ニ相成甚難澁仕候ニ付以御由緒上田彌右
衛門様へ相敷候處多三郎殿々之添翰無之候而ハ御取用難被成旨役人中
々被申渡其上多三郎殿父多右衛門殿當時江戸詰ニ而私心得違之趣多三
郎殿へ一札差出候ハ右四人之者共出牢いたし神事も無滯相勤候様可
相成杯と以之外之儀被申聞不實千萬ニ奉存候得共無是非罷歸猶又多三
郎殿へ□應引合候處色々申延漸右四人之内貳人者先月下旬出牢いたし

御事
社用
御供調進
御投

手錠ニ而村預ニ相成候由御座候得共右一件者其儘ニ捨置一應之答も不仕先月晦日御陣屋出立御當地彌右衛門様御屋敷へ被相越被罷歸候儀者際限無之由ニ御座候左候得共神事者勿論社用等ニ差支前々御觸通之御趣意ニも相背ケ且者神供調進之規矩相立不申神慮之程奉恐入如何斗歎敷奉存候間何卒御慈悲を以右之段被爲聞召分多三郎殿御召出之上御糺被成下神役相勤候者共早々咎差免重而漁場之儀ニ付故障不被致候様被爲仰付被下候ハ冥加至極難有仕合ニ可奉存候以上

文化五年辰九月

根來喜内殿知行所
江州野洲郡五條村
御朱印地
兵主太神宮神主

井口宰相印

幼年ニ付後見伯父

井口勇助印

付添親類

堀井喜藏印

寺
御社
奉行様

上田長次郎
西村三郎

文化五年九月

上田長次郎
西村三郎
堀井喜藏
井口勇助
井口宰相
幼年ニ付後見伯父
付添親類

一札

井口宰相
堀井喜藏
井口勇助
井口宰相

要請
供御調進

要請
下社家
宰相方下役

五六

一札之事

上田彌右衛門様御知行所吉川村野洲川尻築魚漁場之儀、兵主太神宮供御調進之築與申立□社□奉行所江奉願候處、御吟味ニ相成、段々御利害被爲仰聞候上、右御運上之儀ハ是迄仕來之通、彌右衛門様御陣屋々御上納可被成筈取極申候、勿論吉川村御百姓之内、當時築株所持致候者も兵主太神宮下社家ニ無之、宰相方下役杯與申儀ニも決而無之段、是又御吟味之上御分申候、并祭禮之節ハ村々一統之儀故、是迄之通、吉川村御百姓中御差出可被下候、右之通此度掛合之上、熟談仕候上ハ此一件ニ付已來双方申分無御座候、爲後證爲取替申一札仍如件

文化六己巳年三月

江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
井口宰相幼年ニ付
代 勇 助

上田彌右衛門様御内
西村多三郎殿

五七

一札之事

一上田彌右衛門知行所吉川村野洲川尻築魚漁場之儀ニ付寺社 御奉行所
 江御願被申上候處、御吟味ニ相成、段々御利害被爲、仰聞候上、御運上之儀
 者是迄之通、彌右衛門陣屋々上納可致、筈取極申候、尤吉川村百姓之内、當時
 築株所持之者、兵主社下社家與申義、決而無之旨、是又御吟味之上相分并祭
 禮之節者、村々一統之義故、是迄之通、吉川村築株所持之者可差出、筈取極申
 候、右之通、此度掛合之上及熟談候上、此一件ニ付已來双方申分無之候、爲
 後證爲取替申一札仍如件

文化六己巳年四月

上田彌右衛門内 西村多三郎 印

江州野洲郡五條村
 兵主太神宮神主
 井口宰相殿
 代 井口 勇助 殿

築魚漁場
 運上
 下社家

五八

〔御書ハリ紙〕
 當社神主 寄合上田彌右衛門殿御家來 神事妨出入於御評定所御吟味之上、
 文化六己巳年四月双方々差上候、濟口證文、當社主方ニ所持罷在候古寫

根來出警守殿知行所
 御朱印
 江州野洲郡五條村
 兵主太神宮神主
 井口 播磨

差上申濟口證文之事

一根來喜内知行所江州野洲郡 御朱印地兵主太神宮神主井口宰相幼年ニ
 付代井口勇助々御寄合上田彌右衛門様御家來西村多三郎江相掛候神事
 差障候出入、去辰年九月中 松平右京亮様江御訴訟申上、右西村多三郎被
 召出、當時御吟味中ニ御座候處、再應御日延奉願上、得々掛合之上、熟談内濟
 仕候趣意、左ニ奉申上候
 一右出入得々及掛合候處、上田彌右衛門様御知行所吉川村□□川尻川築之
 儀ニ付 兵主太神宮御手洗川又ハ供御調進築杯々申立、右築御運上之儀者
 宰相々石原清左衛門様江直々相納度旨申立候得共、以來共是迄仕來之通

供御調進築
 運上

相心得、御運上御上納之儀者上田彌右衛門様御陣屋上納可致筈、對談取極申候、尤吉川村百姓之内、當時築株所持之もの兵主太神宮下社家々申儀ニハ決而無之候得共神事之儀者一統之儀故、是迄之通、築株所持之者茂差出、神夏取斗候筈ニ取極申候、右出入双方無申分至極納得之上、内濟仕、偏ニ御威光々難有仕合奉存候、然ル上者右一件ニ付重而双方々御願ケ間敷儀毛頭申上問敷候、爲後證、双方連印濟口證文差上申處如件

文化六巳年四月十一日

根來喜内知行所
江州野洲村五條村
御朱印地
兵主太神宮神主
井口宰相幼年ニ付代
訴訟人 井口勇助
相手 上田彌右衛門家來
西村多三郎

御評定所

五九

乍恐以追訴奉申上候

一江州野洲郡五條村兵主太神宮神主井口播磨幼年ニ付代井口勇助奉申上候、私々上田左太郎様御家來西村多三郎江相掛、内濟違變出入御吟味中ニ御座候處、月廻ニ付先月廿五日迄一先歸村被仰付難有仕合奉存候、然ル處、歸村中及承リ候得者吉川村ニ御鎮座有之矢放大明神之儀、當社一躰之社ニ而往古ヨリ神主方ニ而遷宮等之儀仕來候ニ付右社鍵等も築株清右衛門外三左衛門々申者ニ預置候處、近年及大破候故、右鍵村方江取上ケ剩此度外遷宮之儀、村方之者共取斗仕候由承、村方淺右衛門次男藤之助所持罷在候築株、村方江取上ケ無謂利右衛門々申者、當時所持爲致、并清右衛門方ニ同居罷在候同人弟清七株も村方江取上ケ築仲間預置、右躰勝手儘ニ村方ニ而取斗候而ハ是迄之通、規矩難相立、追々右躰御吟味中新規儀共取拵候而ハ際限無之儀々乍恐奉存、困窮之私、難儀至極仕候間、何卒以御慈悲右遷宮之儀、神主方ニ而是迄通仕、且築場之儀も以來村方々差綺不申候

様被_二仰付被_一下置度此段奉願上候以上

文化九申年二月七日

根來小才次知行所
御朱印地
江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
井口播磨幼年ニ付代

井口勇助(印)

寺社
御奉行所様

六〇

對談書

江州野洲郡五條村兵主太神宮神事差障出入、文化五辰年九月中上田彌右衛門家來西村多三郎相手取、右神主井口宰相幼年ニ付井口勇助儀、松平右京亮様御奉行所江致出訴御吟味中、翌巳四月熟談内濟いたし濟口證文差上、事濟候處、及再論當時御吟味中之處、七月七日從往古之社例ニ付同郡吉川村築株之もの神役爲相勸度旨、訴訟方申立候得共右巳年之濟口證文、神事之儀者村

築株之もの
神役

築株所持之書

一統之儀故、是迄之通、築株所持之もの共茂差出、神事取斗候筈と取極候旨書載候儀者、毎年四月二番之酉之日、五月五日兩度者、村々一統之神事故、是迄之通、築株所持之者共差出し於相手方者、右濟口之通り相守り居候處、訴訟方「二」おいてハ右兩度之神事之外、七月七日ニ茂神役相勸來候旨、申立候得共無證據之申争ニ付御吟味之上、御裁許可奉請之處、自今以後村々一統之外、右七月七日ニ茂築株之もの相頼度候ハ、村用差障不相成様、神主ハ築株之もの江相對之上相頼、社用相辨シ且吉川村築場築魚神祓之儀も築株之もの依信心相備候哉、從往古之仕來無證據、殊ニ御運上相納候漁魚之内ハ相備候儀、吉川村於地頭所何れ共差圖難相成筋ニ付御運上米上納差障ニ不相成様、築株仲間一統申合、是迄仕來通、取斗候筈取極申候、信心ニ而相備候儀者、勝手次第何れ共取斗可申積之事、右之通以上

御用
築魚神祓
運上
築株仲間

〔文政六年〕
未

八月〔十六日〕

六一

相手方趣意

對談書

右出入得々及懸合候所、訴訟方ニ而ハ往古々兵主太神宮祭禮之外、正月三ヶ朝、七月七日并迂宮、雨乞ニ至迄社例ニ而吉川村築株之者共神役爲相勤度旨申立、相手方ニ而ハ去ル巳年濟口證文面ニ神事之儀ハ村々一統之義故、是迄通々書載候段ハ毎年村々一統四月二ノ酉日、五月五日兩度神事之儀ニ付右趣意相守り居候段申立、双方申争居候所、吉川村築場運上之義、先濟口證文ニ地頭所陣屋々大津御代官所江年々相納來り候上ハ、右村小物成請持場所ニ相違無之段、御吟味之上、相分り、其外御利解奉請候ニ付此上御裁許請候而ハ往々難相濟義相辨奉恐入候、當時築所持之者とも正月三ヶ朝、七月七日、迂宮雨乞之節、村普請并用辨ハ勿論村法相守り差支無之様不拘築株ニ以來其身以相對被雇候儀ハ、村方差障ニも不相成候ニ付於地頭所も差支無之、且漁魚神献之義ハ往古々仕來ハ不存候得共村内ニ而不携義ニ付御運上差障ニ不

築株

神事

築場運上

小物成請持場所

往々

漁魚神献

相成候ハ、勝手次第、於地頭所ニ差圖難相成旨取究、双方無申分、熟談内濟仕、偏御威光々難有仕合奉存候、以上

訴訟方趣意

差上申濟口證文之事

江州野洲郡五條村 御朱印地兵主太神宮之儀ハ神赫大貴己尊七名を□^武□^武守護第一之社ニ而神號もおのつから兵主太神宮々稱し御鎮座御時代ハ不分明ニ候得共延喜式大社之部ニ有之舊社ニ而神主家祖も不相分、古來々相續仕、氏子村ハ五條村六條村安治村野田村比留田村西川原村吉地村井口村須原村堤村乙窪村木部村小比江村八夫村服部村津田村吉川村右十七ヶ村之内ニ而堤村二ヶ村役相勤、兵主十八郷々唱へ來り、神事之儀ハ四月二ノ酉日、五月五日兩度大祭ハ氏子村之内ニ而神事每一ヶ村宛神事之頭相勤順番廻り例年二ヶ村ツ、相當り其外正月三ヶ朝、七月七日、十一月二ノ酉日、神事有之、且又石原庄三郎様御支配所野洲川筋築場御運上御上納之儀ハ上

神事之頭

築場運上
上納儀

足代

漁魚神歌

柱人

駕株

聖王

納銀之外爲足代錢百文、相添吉川村取次上納致來り右株所持之者吉川村二面太郎右衛門与三右衛門淺右衛門半次郎甚太郎清右衛門平治次右衛門嘉左衛門平藏長右衛門宇右衛門德右衛門并平七清七藤之助平四郎并口村重右衛門右四株ハ當時絶家其外須原村新之丞且神主播磨往古カ持傳ヘ

□脈連綿相續致し來り例歲神事ハ勿論迂宮雨乞等之臨時ニモ出役いたし漁魚神歌之儀ハ初漁之節、鯛魚七尾、四月二ノ酉日雄五十尾、五月五日雌雄五十尾、右三ヶ度ハ神主方江持參り神主カ調進仕來り七月七日魚數見斗、株人より直ニ相備神主築株其外當日出役之者とも拜殿ニ而頂戴仕來り、兵主太神宮諸普請其外入用一切十八郷江割合致出銀仕來り候、築株ハ是迄除キ有之候、右之通ニ而古來カ少も無故障仕來候之所、文化五辰年神事差支候ニ付神事差障出入申立、同年九月松平右京亮様へ御訴訟奉申上、段々御吟味被成下、御吟味中、内濟仕度、御日延奉願上、掛合之上、是迄仕來り通相心得、御運上御上納之儀ハ上田左太郎様御陣屋カ上納可致、神事之儀ハ村々一統之儀故、築株所持之者共も差出し神事取斗候筈ニ熟談仕、翌巳年四月御評定所へ濟

口證文差上置候、然ル所、其後双方心得方行違、猶又午八月中内濟違變出入申立、再ハ松平右京亮様御勤役中御訴訟奉申上候所、引合之者共も被召出、御吟味中、御轉役被遊當、御奉行所様江御引渡ニ罷成、御吟味中ニ御座候處、再應御日延奉願上、掛合之上、熟談内濟仕候趣、意左ニ奉申上候

一右出入篤々及懸合候所、去ル巳年奉差上候、濟口證文之通、御運上御上納之儀者、勿論萬事是迄仕來り通可致、筈ニ取極、訴□并引合之者共一同無申分、熟談内濟仕、偏ニ御威光カ難有仕合ニ奉存候、以上

六一

爲取替一札之事

□根來出雲守知行所江州野洲郡五條村御朱印地兵主太神宮神主井口播磨幼年ニ付代井口勇助儀、上田左太郎家來西村多三郎ヲ相手取、内濟違變出入申立、文化七午年八月中松平右京大夫様寺社御奉行御勤役之砌、奉出訴候ニ依而、相手多三郎被召出候處、返答書を以、夫々御答申上、其後同人病

築株・神人
御主下役

氣ニ付代岡村瀬兵衛罷出、御吟味之上、翌^{〔文化八年〕}未年十一月中引合人共被^{〔文化八年〕}召出、追々御吟味御座候内、九ヶ年以前^{〔文化十二年〕}亥年四月中、右京大夫様被遊、御轉役、松平右近將監様江御引渡ニ相成、猶又御呼出御座候處、右瀬兵衛病死仕候ニ付、中場半吾罷出候處、是又病氣ニ付代里見十藏罷出、御吟味中ニ御座候處、六ヶ年以前^{〔文化元年〕}寅年十二月御調中一先歸村被、仰付双方共歸村罷在候、尤其節〇論中^{〔文化五年〕}たり共和融内濟可仕様、厚御利解奉請難有仕合奉存罷在候處、去^{〔文化五年〕}ル午年六月中右近將監様御儀御役被爲在、御免當御奉行所様江御引渡ニ相成候段、乍恐奉承知候、然處、今般於國許兵主太神宮氏子村庄屋共取扱立入、篤与及掛合、双方得心之上、熟談内濟仕候趣意、左之通

一兵主太神宮祭禮之儀者、四月二番酉ノ日、五月五日兩度ニ有之候處、吉川村築株當時所持之百姓共、右社神人又者神主下役杯与申儀、決而無之旨ハ文化六巳年四月中濟口證文之通、御吟味之上、相分り申候、尤右兩度之神事者、村々一統之事故、差出可申候、且正月三ヶ朝七月七日、迂宮雨乞之儀者於此方者不辨之儀ニ候得共、吉川村之村用諸事差支ニ不相成様、不築株^{〔二〕}拘扱

小物成
御主
通上

搦人取扱人ハ相雇候様、此度取極、猶又御小物成吉川村築場之儀ハ同村支配ニ相違無之上者、去^{〔文化六年〕}ル巳年四月中濟口證文之趣を以、御運上之儀も前々仕來之通、吉川村役人取立、左太郎陣屋ハ大津石原清左衛門様御役所江可致^{〔二〕}上納、答取極、双方并引合之者共一同熟談いたし納得候、然上者向後出入ケ間敷義無之様可致候、爲後日一札依而如件

文政六未年十二月

上田左太郎家來
里見十藏 印

兵主太神宮神主
井口播磨殿代
井口勇助 殿

右之通、双方御熟談之上、内濟相整候^{〔二〕}付、扱搦人取扱人爲後證、一同奥書連印仕候、以上

稻葉大學領分六條村
四郷惣代
扱搦人 庄屋 源 藏 印
朽木主膳知行所五條村
同 庄屋 宇 兵衛 印

六三

乍恐以書付奉願上候

江州野洲郡五條村兵主太神宮神主井口播磨奉申上候、私伯父井口勇助義御吟味中、先達而揚屋入被仰付置奉、恐入候然ル處、同人義者平日病身者ニ有之殊ニ一兩日之暑中ニ而者一命之程も難斗誠ニ歎ケ敷奉存候間、何卒格別之御勘辨ヲ以御慈悲之御沙汰奉願上候、以上

申
□月十七日
寺社
御奉行所

上田左太郎知行所服部村 八印
同 庄屋 唯
遠藤但馬守領分八夫村 助印
取暖人 庄屋 喜
木下奉助知行所 庄屋 丈 助印
同 庄屋 丈

根來出雲守知行所
江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主
井口播磨(花押)

六四

乍恐以書付奉願上候

江州野洲郡五條村兵主太神宮神主井口播磨奉申上候、私々今日井口勇助之御慈悲願書ヲ以私罷出候段、御差當奉請恐入一言之可申立様無之、殊ニ私身分宿御預ヲ被仰付相慎可罷在候處、其儀も無之罷出候段、全私義心得違仕願書奉差上候間、何卒以御慈悲右願書御下ケ被成置候様、此上之御慈悲也難有仕合奉存候、以上

申
六月十七日
寺社
御奉行所

根來出雲守知行所
江州野洲郡五條村
兵主太神宮
神主井口播磨(花押)

六五

〔表紙ハリ紙〕
内御道要出入
寺社御奉行様へ差上候濟口證文寫 壹册

根出御守權御知行所
御朱印地
江洲野洲五箇村
其主本神官神主
井口播磨

〔第六二號ト畧々同文ナレド稍々相違セル箇處ノミ次ニ採録ス〕

双方得心之上、熟談内濟仕、當二月中濟口證文奉差上候處、井口勇助彼是申立、殊ニ引合人須原村百姓新之丞調印無之ニ付御察當ヲ受奉恐入、尤新之丞并ニ本人井口播磨共可被召出之所、播磨義出府罷在新之丞義者病氣ニ付代弟新吾ヲも被召出當時御吟味中ニ御座候所、當扱人とも篤と及掛合双方納得之上、熟談内濟仕候趣意、左ニ奉申上候
上田左太郎陣屋カ大津御代官石原清左衛門様御役所江上納仕候筈、以後相互ニ新規之義者不及申出入ケ間敷義不仕段是又取極、双方納得之上、別

紙一札爲取替聊無申分熟談内濟仕、偏ニ御威光与難有仕合奉存候、然ル上者右一件ニ付双方御煩ケ間敷義奉申上、間敷候爲後證訴答并扱人引合之者共連印濟口證文差上申處、仍而如件

文政七年七月十二日

〔井口播磨以下廿五人分連名省略〕

寺社
御奉行所様

六六

一五條

〔宮神主井口播磨代叔父井口勇助カ當地頭所役人江相懸り候出入之儀、永々ニ相成、氏子村老少とも相歎、各江取扱被頼依之各方實意ヲ以、訴答江情々御掛ケ合有之、去ル末年極月中熟談内濟相整、即濟口證文爲取替一札とも一同納得之上、調印仕置、當二月中出府之上右濟口證文 御奉行所様江奉差上候處、勇助在外違變申立、神主播磨も勇助同道出府いたし居候ニ付御呼出シニ相成、且須原村新之丞義も御召出し有之候處、煩ニ付代弟新吾罷出、段々厚御利解被仰聞候ニ付各方カ

小物成築場
吉川村支配
運上

此節播磨江再應御懸合被成、拙者共々各方迄一札差入候ハ、播磨新吾兩人茂二月中奉差上置候濟口證文通り得心之上、調印爲致候様、各御申被成然ル處、拙者共義ハ引合之事故、書付等差出義迷惑ニ存候得共永引候而者御奉行所様江奉忍入、且銘々難儀ニ付各方迄差入申心得一札左之通

一御小物成吉川村築場之儀、兵主附之様申立、十七ヶ年以前辰年勇助被訴出候處、御糺之上、吉川村支配ニ相違無之旨ニ而已ニ御運上等も是迄仕來リ之通相心得、村役人取立、當地頭所ハ大津御代官所江上納可被成、取極、其翌巳年四月中内濟相整、御双方ハ濟口證文被差上置候通、相心得罷在候處、其後勇助内濟違變被申立、是又此度熟談内濟相整候上者、築場之儀、外御小物成並、惣而吉川村役人差配可致答、尤正月三ヶ朝七月七日遷宮、雨乞之儀者相手方ニ而不辨之儀ニ候得共、吉川村之村用諸事差支ニ不相成様、不築株ニ拘扱人共々右之者共相雇候様、此度取極候上者未々ニ至リ村役人不實之差支申立、壹人も不差出候様之義等、都而不取斗之義ハ致間敷候爲、後日差入申一札仍如件

寫株

文政七申年七月十二日

上田左太郎知行所
吉川村
庄屋代兼
彦右衛門

同村惣代
組頭
兵藏

取扱人
八夫村
庄屋 喜助殿
提村
庄屋 丈助殿
挨拶人
兵主四郷惣代
安治村
庄屋 佐平殿

右者内濟違變出入、於國許拙者共段々取扱ヲ以、去ル未年十二月中熟談内濟相整、一同調印仕置、當二月中出府之上、右濟口證文御奉行所様江奉差上候所、井口勇助殿ハ故障被申立、厚御利害被爲仰聞候得共、何分納得不被致候

二付 御奉行所様より見十藏殿并吉川村庄屋代年寄彦右衛門江御利解
 被仰聞、尤正月三ヶ朝七月七日遷宮雨乞之儀者吉川村不辨之儀ニ候得共
 村用諸事差支ニ不相成様、築株ニ不拘右之者共仲人より相雇候旨有之、左候
 得者末ニ至り若村用差支有之申立候而者故障ニ相成可申哉と勇助より疑
 念仕候儀、尤ニ候得者立派ニ濟口證文江者不書戴候共吉川村役人中より扱人
 江差入候一札江行末故障ニ不相成候様、書加江可申段被仰聞且勇助殿江
 者先濟口證文を爲御讀聞之上、築場之儀、先濟口ニ振候様申立候得共格別振
 候儀者無之旨 御利解被爲 仰渡依之尙又拙者共より双方江數度及掛ケ
 合種と取扱ヲ以、吉川村役人中より扱人方江前條之通、一札取之候ニ付勇助殿
 至極承伏ニ而調印被致和融内濟相整、當七月十二日濟口證文奉差上候所、同
 月廿二日速ニ御開濟ニ相成、則扱人より書面之通、寫し遣し申所、相違無之候、爲
 後日一札仍而如件

文政七甲申年七月

扱人
 八夫村
 庄屋 喜助 (印)

御 係

兵主太神宮
 神主
 井口 播磨殿

六七
 乍恐以敷書付奉願上候

右井口勇助歎願趣意、左ニ奉申上候

御根來出雲守知行所
 兵江州野洲郡五條村
 井主太神宮神主
 後見罷在候同人伯父
 井口勇助

同 堤村 庄屋 丈助 (印)
 四郷惣代 同 安治村 庄屋 佐平 (印)

大祭

御料所

新漁・犧牲
神歌

聖仲間

築業・社用

聖運上

足代

村謝
神役之務

築場

一當社兵主太神宮之儀者同國同郡之内拾七ヶ村之氏神ニ而御座候、年中祭事度ニ御座候内、四月二番酉之日、五月五日右兩度ハ大祭ニ御座候、其外正月三ヶ朝、七月七日、霜月貳番未之日并臨時ハ迂宮、雨乞等ニ御座候、且亦同國野洲川筋ハ御料所ニ而御代官石原清左衛門様御支配所ニ御座候、右川筋江從往古築を掛ヶ獵業仕、則新漁爲犧牲^(註)神献仕來候、右株人共ハ上田左太郎様御知行所同國同郡吉川村ニ而拾六人、稻葉丹後守様御領分同國同郡須原村ニ而新之丞、外ニ同井口村重右衛門、此もの儀ハ先年備後福山江被召出、右子孫當時井口源治株ハ惣仲ヶ間江私方^(註)預ヶ置申候、右之もの共義を築業と唱へ、當社神事之節罷出、社用相動來候、右築御運上納方之義ハ上納銀之外爲足代、鑑百文ツ、年々相添、上田左太郎様御知行所吉川村之御用序を以、上納仕來候處、去ル拾八ヶ年已前文化五辰年吉川村役人共申候義ハ右御運上銀同村ヶ取次上納仕候ニ付、村請之場所一躰ニ而神役之株トハ譯違ト申、築場村方江可相奪企ヶ種々理不盡之取斗仕候故、私ヶ及懸合候ハ右築場ハ往古々當社神事相續之請持場ニ而吉川村御請負場

株人
野洲

所トハ高分ケも有之御檢地帳ニも別段私方始株人共名前入別肩書ニ持主ト在之、既寶曆年中右川尻ニ而築洲新開ニ相成候場所、新開願之節、湖水端ハ吉川村御請、川筋ハ井口宰相御請故、築洲新開双方江被仰付、被下置候ハ、古田獵場共差障ニ不相成様開發可仕、若外々新開御願申上、古田獵場等江差障候様^(註)成、普請等致懸ヶ候而ハ私共迷惑仕候故、双方江被仰付被下置候ハ、相互ニ申合不差障様、新開出來可仕之旨、私父助之進時代、吉川村連印を以、御支配御役所江御願申上候處、其段御勘定所江御伺之上、御聞届ヶニ相成、既其頃庄屋治郎左衛門年寄彦右衛門ハ右願連印之内ニ而能々相辨居候儀ニ付、其段私ヶ申聞候處、左候ハ、他村所持人之場所御運上納方、纒錢百文位ニ而右村方ヶ取次相納候義ハ難相成候間、私方ニ而勝手次第可致旨申候ニ付、是迄吉川村手續を以、相納^(註)を私方ヶ直ニ相納候而御支配御役所ニ而御聞請之程も如何と奉存候ニ付、双方連印を以、御願申上度、連印之義相賴候處致承知、乍然御地頭役人西村多三郎江相届候上、連印可仕旨申ニ付、御地頭御屋舖ヶハ御代々當社御崇敬ニ付、私方江も

被下候品物も御座候程之由緒柄之事故私も追而多三郎方江罷出可相願旨約諾仕私儀ハ既ニ罷出尤夫迄ニ吉川村カ可申入置義ニ付其段多三郎江相尋候處未夕沙汰無之何等之儀と相尋候ニ付前條之始末私カ申入候處左候ハ、書面を以申聞候様申候ニ付退引仕候之處懸合濟違變仕、連印之儀不承知之趣吉川村カ申越依而ハ築場御運上納方當惑仕候ニ付連印之義一旦承知仕候而猶亦不承知之旨相斷致當惑候段多三郎江以書面申入候處同人申候ハ江戸表江申入可然取計吳可申之間及沙汰候迄差扣居候様申聞候ニ付差扣居候處却而吉川村築株之内拾四人呼出し築場ハ吉川村請ニ無相違と申書付取捨右株人共江印形可致旨申付候處不承知申立候者四人迄十手ニ而打すへ其上後江手鎖入半等申付候ニ付殘拾人之者共其威ニ恐れ無是非調印仕候得ハ他參留申付置四月大祭前ニ相成手紙差越候ニ付私罷越候處右築場ハ吉川村請と申遣ケ成證據同村カ差出候ニ付村方請ニ無相違其段私ニも相心得候様申聞候ニ付右場所之儀ハ私方ニも急度證據書物も有之間此儀ハ追而相調へ先神事之義ハ往古

築場

築株

株人

吉川村請

カ築株之者罷出候義ニ付差出候様懸合候處築株之者神事出役之義不存義ニハ無之候得共是迄届も無之事ニ而出來リ候義を表立申候ニ付其筋不埒ニ付取締へ差入嚴敷咎申付置候其上私義も表向於役宅築株神役之義申候義ハ難相濟杯申之何れニも右之者共義以來決而差出候儀不相成と申急度差留候ニ付無據出府仕佐太郎様御屋舖江直ニ相歎候處其頃多三郎父多右衛門江戸詰ニ而同様取敢不申其上多三郎カ添簡無之儀ハ難取上杯と法外之事共外役人とも申聞候ニ付無詮歸村仕於京都御奉行所添簡頂戴之上猶又出府仕文化五辰年九月中松平右京亮様江御願申上候處御吟味之上御利解被仰渡翌已四月萬事は迄通内濟仕濟口證文御評定所江奉差上歸村仕難有仕合依之翌午年七月迄諸事相勤候七夕神事ニ至リ村役人共又候差止メ候ニ付築株之もの罷出不申神事不相勤依之内濟違變申立同年八月中再ひ松平右京亮様江御願申上候處相手多三郎被召出御直之御吟味之節多三郎御答申上候ハ濟口證文ニ村一統と御座候故大祭兩度と相心得居候處虫干と唱へ七夕ニも神事在之由

築株之者

築株神役

七夕神事

大祭

此用
神事
獵魚神歌

申聞候得共不辨義夫共勇助を得と懸合仕候得ハ何れニも相成可申義聊
之對談も不仕願出候義ニ御座候様申上候處虫干ニ而も煤拂ニ而も社用
ニ候得ハ都而神事ニ在之濟口證文ニ是迄通と在之上ハ勇助より懸合行
届不行届ハ捨置是迄通之儀百姓共心得違無之様其方々精々吟味可致之
筈濟口證文差上候迄ニ在之分ハ都而是迄通ニ而勿論之儀彼是申紛候事
ニ而ハ此度ハ百姓共御呼出御吟味之上神事ニ手支候談しニ却而其方相
加り居候ハ其儘御差置無御座候旨被仰渡引續御吟味役様御吟味之
節も同様御答申上候處村々一統と斗在之儀ハ勇助方ニも文面不行届之
義も有之候得共兩度と限候文面無之上ハ濟口已前之儀ハ都而是迄通可
致筈ニ有之依而ハ其方心得違之義ニ候ハ其段可申上百姓共御呼出之
上ニ而ハ迷惑可致得と勘辨之上御返答可申上旨被仰渡候處恐入申立
方無御座候故歟亂心仕候趣ニ而其後代人差出御吟味請候所右御吟味中
御轉役ニ付松平右近將監様江御引渡ニ相成段々御吟味中大祭兩度之
外神事并獵魚神歌之儀も在來候ニ相違無之趣ニ付何れ是迄通可被仰付

神事御差留
懸合
懸合
懸合

尤御書取相濟御調中暫御間も可被爲在之間一先歸村仕追而御沙汰被成
下候迄國元ニ而差扣居候様去ル八ヶ年已前寅年十二月中被仰渡國元
ニ差扣居候所右出入中神事御差留ニ付氏子村々一同相愼罷在候處御他
領數多御入合氏子村々ニ而右出入中神事不相動義を一同相歎候ニ付論
外御他領村役人共立入内濟取扱種々懸合吳候得共相手方ニ而ハ氏子村
論外之もの共懸立候義を願ふ幸ニ存築場を元來目論見立候通吉川村ニ
而致支配と追而ハ諸掛等多分懸自ラ難持堪様仕成し私方始新之丞重右
衛門築株も終ニハ吉川村之ものニ可致企々舊來差支無之相動來リ候神
事を新規ニ村用ニ差障坏と申立從來無滯御運上相納獵魚神歌仕候義を
株外之もの共差止メ候ニ付聊以納得連印仕候心底無御座候得共長々神
事不相動候ニ付氏子論外之村々一同之愁ひ就而ハ論外之故障出來候而
ハ重々奉恐入候ニ付御聞濟否之義ハ不奉存候得共於國元氏子之もの共
立入内濟取扱右等不得止振合も御座候ニ付無據相手方趣意通書付調印
仕昨年二月中出府仕松平右近將監様御役御免被爲蒙仰候ニ付

水野左近將監様江右始末申立御願申上候處、一旦書面調印仕候上ハ其筋難相濟旨段々御利解被仰渡奉忍入播磨義ハ重キ御利解難相背誠以時運之至りと相あきらめ候得共於私ハ乍暫後見中ノ事務築場被取掠候之上諸神事迄類廢之姿と罷成候而ハ神慮ハ勿論祖先死亡仕候父兄共江對し難相濟義ニ付私身分何様御咎被仰付候共其儀聊以奉厭ひ候義無之御評定所江奉差上候先濟口證文之通神事相勤候様一向ニ奉願上候然ル所揚リ屋被仰付候内疾瘡ニ相惱ミ猶亦新之丞義先年爲引合被召出江戶詰中病氣ニ付其節申立候ハ築場之義ハ是迄之通獵業仕候様被仰付被下度神事出役之儀ハ村方ニも故障無之ニ付是迄通罷出候共何様相成候とも違背仕間敷旨ニ而歸村之義奉願上御聞濟ニ而歸村仕居候然ル處（文政六年十二月カ）昨年國元ニ而認候濟口證文ニ連印無之ニ付猶又被召出候處新之丞ハ今以病氣ニ付弟新吾出府仕申聞候義ハ右出入何様相成候とも無是非此上江戶詰仕候而ハ諸難費ニ家跡相續も難出來旨申敷候ニ付故障無之新之丞及潰ニ候而ハ於私も敷ケ敷旁以乍恐御利解不奉承伏候得共御

御事出役

御事

獵業神歌

獵場運上

御事

威光無是非相手方趣意通之濟口證文奉差上候義ニ御座候然ル所歸村後諸神事式種々姿を替相糺し候得共夫是先成様ニ相勤申居候義ニ御座候吉川村役人とも差挾ミ候趣意ニ而乍恐御武運御長久五穀豐熟御祈願之神事終ニハ類廢仕神職業も不相立何共敷ケ敷此段申立御願可奉申上とも奉存候得共難費必支と手支且ハ事馴候者共故私方江顯然慥ケ成證據御支配御役所ハ被下置候築場を種々ニ申紛候程之もの共其上左太郎様武威を後江立ニ押立候義ニ付愚昧之私逆茂可奉御明斷請儀ハ及間敷奉存候ニ付何卒奉繼御慈悲出入已前迄仕來通築場御運上納メ銀之外爲足代錢百文ツ、相添差出吉川村ハ納吳獵魚神献仕候義を故障不申築場右村支配杯との新規濟口書面相消神事相勤候様仕度奉存候得共右奉申上候通何分強勢之者共故此末相手取御願可申上力も無御座候心外ニ消光仕居候間乍恐何卒此段御高察被成下此上ハ御公儀様以御威光在來リ通神事相勤神職業相立候様被仰付被下候様幾重ニも奉願上候右願之通御聞届被成下置候ハ一旦類廢仕候神事御取立全御仁惠冥加

至極如何斗難有仕合奉存候、以上

六〇

覺

一米貳石壹斗壹升貳合

築運上米

此代

銀百七拾壹匁壹分五りん

但米壹石^{二付}銀八拾壹匁三厘五毛かへ

此金

貳兩三分

古金納相場
但六拾貳匁九分かへ

此代百七拾匁七分貳厘五毛

差引 四〇〇七厘五毛

此金

四百五拾五文戻し

辰十二月廿四日

地下

やな 仲中

築運上米

やな 仲中

庄左衛門築

築株

仲間入之振舞

築株

地下

築株

六一

一札

一庄左衛門築一株古來々所持仕候處、三十ヶ年以前家内一統不殘死去仕候、
 □^後之築中間之者共々右庄左衛門所□^持之築株無謂中間江引取置、何之無辨
 清右衛門弟へ譲り中間入爲致罷居候處、猶又近來心得違之義共有之候、
 付服部於御役所様御慈悲之御理解被仰聞、依之乍^留惺諸事勘辨仕候得、右
 庄左衛門築中間江引上之義、無主家^二候得、尙以理不盡之義、今以奉存
 候、尙其上中間入之振舞迄爲致候段奉恐入候事共、而御座候、若御陣屋
 様々御察當御糺有之候ハ、一言之申被無御座仕合、御座候間、此度清右
 衛門弟并親類談合仕候、本人親類一統納得仕候上、右築株庄左衛門方江差
 戻し申度奉存候得共、無主家^二而親類と申茂甚太郎、小三郎、清右衛門、三軒
^二而御座候、此者共も築株所持中間^二而御座候得、乍恐御地下御預り置
 可被下候、右之始末申上候通り、少茂相違無御座候、依之築中間惣代并清右
 衛門□本人親類一統連印仕、一札奉差上候、仍而如件

文化七年
午九月

築中間惣代
宇右衛門
與惣右衛門
長左衛門
清右衛門弟
清七

親類

三左衛門
利左衛門
兵左衛門

御役人中様

六二

〔野田彌十へ遣下書〕

兵主太神宮

神主
井口宰相

一兵主ハ頼朝卿之御健立なり此御代ハ神領三萬石餘とも申五萬石餘とも申委細ハ知レ不申候

一井口宰相と申ハ元正天皇御宇養老二年五條播磨守資頼と申よりはしま

五條播磨守
資頼

神領
神主

り終ニ中絶申事無之候四代以前井口清右衛門尉二男致養子五條と申名字拾名在之ニ付井口氏に今名乗申事ニ候紋ハ丸之内いしたみにて御座候

一神領之事尊氏公迄相違無之由及承候所其後度々ニ減少いたし申と承候所委不存候但天正十九年之勘定目錄などに今神主手前ニ在之候高四千九百石餘也其外數通之古キ折紙在之由承申候

一當神領九石五斗餘其外境內權現様御代ニ拜領仕大猷院様當公方様御朱印御二通御座候

六三

以書付□狀覺

江州野洲郡五條村
兵主太神宮神主

井口播磨守

一當社兵主太神宮申者欽明天皇御宇湖水八ツ崎浦と云所ヨリ出現玉ふ大

御手洗川
打築魚漁場
御事存置
御調進之魚
御祈

神領

打築・社領

社領

社主・社家

小物成

川役築米

神祭神大己貴命、右大將賴朝公之時、高三千七百九石餘寄附被爲、其節野洲川之流ヲ當社之御手洗川ト唱布、兵主郷内吉川村江流込、此所ニ打築魚漁場有之候、而當社諸神夏祭禮之節、御調進之魚漁所也、其後文永之騷亂ニ神領被爲、沒收神式も惣テ退轉せしを尊氏之時、大神之神德及、聞再ハ神領返し祭禮如元可復ト御下知狀被下候、則文明明應享祿度、折紙等被下候、而今ニ所持仕候、且亦打築之儀者明應天文兩度社領築之折紙等被下候、所持仕候、則折紙ニ兵主社家中ト書記頂戴仕候、其後信長公之時、社領不殘被爲廢空しく星霜を送り神主始社家銘、右打築而已所持致し神勤仕候、秀吉公之時、玄米五石宛年々寄附有之、則天正十五年同十八年之折紙今ニ所持仕候、其後徳川家光御朱印ニ而九石五斗餘并社中竹木林等御寄附有之候、前書打築之儀者天下之御小物成ト相成、右吉川村小物成帳江被爲治川^(前カ)役築米として現米貳石^{四斗六升}宛年々代官所江上納仕來り候處、近比ハ川役築米之名ヲ飭役米と名目相替り誠以心痛仕居候、全是ハ川役築米ニ紛れ無御座候、五ヶ年以前石原清一郎殿御役所之小物成帳拜見仕候處、飭役米

川役築米
御漁場
御事存置
御調進上

御漁

ニ相成候趣奉驚入候、其後歎願茂致度奉存候得共、昨今之形勢奉恐入候、今般御一〇^(前カ)之折柄、何卒當御役所ニおゐて前々之通り川役築米^(前カ)ト御書直し被下度奉願上候、右築漁場之儀ニ付、寶曆十年比、吉川村地先葭草場運上石原清左衛門殿御役所ト被仰付候砌、野洲川尻草場請、村方江請候得共、自然築漁儀之障リニも可相成哉と奉存候故、其砌石原御役所へ奉歎願候處、御聞濟ニ相成候、而村役人差出し右川尻草場請致し候、而茂少も川漁之障リ無之、村方小前水吞迄御承知之請印爲致候、右請書之寫シハ石原清左衛門殿ト奥書調印之證札、御下ケニ相成、今ニ所持仕候、左候得者此度川尻ニおゐて新規之飭ヲ立候儀、誠ニ以當惑難澁仕候、何卒前條之^(以下白紙ノマ)

語彙篇

凡例

- 一 語彙の採録は編者に於て必要と認めたるものであるが主として術語に限つた
- 一 註解は成る可く簡單にしたが編者の誤解による所なきを保證し難いから一應の参考に供する程度のものである
- 一 註解の末尾に「三」とあるは三上神社關係に用ひられたもの「兵」とあるは兵主神社關係に用ひられたものであつて何れとも無きは共通せるものである

ア

秋築（あきやな） 秋に設備するヤナにして所謂「のぼりやな」なり、ヤナ漁期は大體春秋二季に分たるあぐ・あける（上ぐ） 設備しあるヤナを撤却すること「指す」の反對 〔三〕

足あらい（足洗ひ） ヤナ株を所持する家にて養子せる場合、仲間に披露すること、米酒を差出すなり〔兵〕

あめのうを（鰯・鮫） 鱈科に屬せる淡水魚、脊部は暗蒼色にして黒斑と小朱點あり、最も美味なる時季は秋なり、關東地方にてはヤマメと云ふ、鮭・江鮭などとも書く、多くは鰯を宛つ 〔三〕

あめやな（鰯築・鮫築） アメノウウヲを捕へるためのヤナ 〔三〕

鮫築（あゆやな） 鮫を捕へるためのヤナ 〔三〕

ウ 杭を立てること、杭を「切る」と云ふも同じ（ヤナを設備するとの意を有す） 〔三〕

ヤナを打つとも云ふ

〔兵〕

魚築（うをやな） たゞヤナと云ふに同じ「吉川村魚築」・「惣魚築貳拾株」などとなり 〔兵〕

カ

かく（掻くカ） 網（アンコアミ・イカアミ）にて魚を掬ふこと「あみにて鮫かき申候」などとなり〔三〕

かける（懸ける・掛ける） ヤナを設備すること、ヤナを打つに同じ 〔兵〕

片築・半築（かたやな） 川面の半分設備せるヤナ、獨占・濫漁を制限す、従つて収益も少きわけなり〔三〕

株人（かぶにん） ヤナ株人・ヤナ株を所持する者、株主ともヤナ主とも云ふ 〔兵〕

株主（かぶぬし） 前項参照

神主（かぬし） 兵主神社に奉仕する常任の神職なり、所謂「社附ノ社家」にして他の社家を支配す、ヤナ漁業に關してはヤナ頭・獵師頭などと稱す、三上神社に於ける「神館」の如し 〔兵〕

神主下役（かんぬししたやく） 兵主關係のヤナ衆を指す。〔兵〕

供御之神事（くごのしんじ） 供御は神饌の意、茲にては神前に魚類を供へること「供御調進之神事」とも云ふ。〔兵〕

供御之獵場（くごのれふば） 神饌の魚類を捕へるための漁場「神供漁場」とも云ふ、所謂吉川のヤナ漁場を指す。〔兵〕

供祭築（くさいやな） 神前に供進する魚類を捕へるためのヤナ、古く野洲川のヤナは三上神社の供祭築として同社の財源たり、野洲川を神領と稱せし所以なり。〔三〕

下鮎（くだりあゆ） 上流域より下行する鮎、之をクダリヤナにて捕へるなり。〔三〕

下築（くだりやな） 上流域より下行する魚類を捕へるためのヤナ、従つて上流へ上流へと發展するものなり。〔三〕

なり。〔三〕

くひ（杭） 漁具としてのヤナの部分品、簀・桁を支へる縦の棒なり。〔三〕

過怠錢（くわたいせん） ヤナ衆の規約に反せるものが課せられる所の罰金。〔三〕

御供料（ごくれう） 廣く言へば神前の献饌物なれど主としてヤナにより捕へたる魚類を指す。〔兵〕

指上之時（さしあげのとき） ヤナを撤却する時（漁期の終了を意味す）。〔三〕

指す（さす） ヤナを設備すること「指切る」なども云ひ「築指人」なる呼稱もあり（兵主關係の「かける」と同じ）。〔三〕

下役（したやく） 下廻役の意にして神主下役・築頭下役・獵師頭下役などと稱す、兵主關係のヤナ衆を

指す（次項参照） 〔兵〕

下社家（しもしやけ） 兵主關係のヤナ衆を指す、供御調進・神事社用に奉仕するの義務あり、社懸り銀を免除せらる、平素は「百姓」格なり（神人・神役之者などと同じ）。〔兵〕

社家（しやけ） 神事社用に勤仕すべき家柄にして常任の神職家（例へば三上神社に於ける「神館」・兵主神社に於ける「神主」の如き）に非ず、主としてヤナ漁業により神社と緊密なる關係あり、他の言葉を以てすれば神事組員と云ふべきか、但し三上關係の者は兵主關係の者より稍々高級なりしが如し、何れにせよ彼等がヤナ漁權を占有せるなり、なほ兵主關係にては次の如き語あり、本座社家・年寄之社家・社家仲間・社家役・社家子（家筋相續人の意）

社領築（しやりやうやな） 兵主神社の領有するヤナにして「神供漁場」に同じ、三上神社に於ける供祭築の如し。〔兵〕

神供漁場（しんくぎよちやう） 野洲川尻に在る兵主神社支配のヤナ漁場にして神饌の魚類を捕へるところなり。〔兵〕

神館（しんくわん） 三上神社に奉仕する常任の神職、各種の禁忌あり、ヤナ漁業との關係は兵主神主の如くに明瞭ならず。〔三〕

神献（しんけん） 神供漁場より神饌の魚類を献納すること「築魚神献之儀」などと云ふ。〔兵〕

神事（しんじ） 祭禮を云ふ、純粹の宗教的儀式に非ざる神社の用務を含む場合あり、また神饌の魚類を供進する事を専ら意味する場合もあり「供御調進之神事」などとなり。〔兵〕

新平（しんひらか） 兵主神社關係のヤナ衆神人にして社家の列には入れども神役を勤めず所謂本座社家に非ざる者（宮座に於てモロトより下級の者をヒラとかワキとか云ふ、参考とすべきか）。〔兵〕

進退（しんたい） ヤナを支配すること、同じ意味に